

ゆき げ ざわ
市原市雪解沢遺跡

—千葉県立市原園芸高等学校グランド造成に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1984年

千葉県立市原園芸高等学校
財団法人 千葉県文化財センター

ゆき げ ざわ

市原市雪解沢遺跡

—千葉県立市原園芸高等学校グランド造成に伴う埋蔵文化財調査報告書—

1984年

千葉県立市原園芸高等学校
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

市原市を南北に継断し東京湾に注ぐ養老川流域は、比較的首都圏に近く、近年この下流域地帯はベッドタウンとして開発され、めざましい発展をとげておりますが、中・上流地帯には、いまだ豊かな自然環境が残り、貴重な遺跡も多く保存されております。

このたび、千葉県立市原園芸高等学校では学校施設の整備拡充の一環としてグランドの造成工事を計画しました。同校の周辺には数多くの古墳が残されており、対象地域内においても埋蔵文化財の所在が予想されるところがありました。

そこで、千葉県教育委員会では、その取扱いについて、同校をはじめとして関係諸機関との事前協議を重ねてまいりました。

その結果、グランドの造成工事はなるべく現状の地形を損うことなく実施することとし、地域内に所在する古墳1基についてはやむを得ず記録保存することとなりました。また、その他部分についても遺構・遺物等の所在が考えられるため、この実態を把握する措置を講ずることとなり、(財)千葉県文化財センターが確認及び発掘調査を実施することとなりました。

調査に当っては、県立市原園芸高等学校と詳細な打ち合せを行い、昭和58年10月1日から同年11月30日まで発掘調査を実施してまいりました。

発掘調査の結果、弥生時代から古墳時代の遺構・遺物が数多く発見され、特に、養老川中流域において、盟主的存在と考えられておりました瓢箪塚古墳の全容が判明したことは、当地域における古代文化の一端を明らかにする大きな成果と考えます。

このたび、調査結果を刊行するに当たり、本報告書が学術的な資料としてはもとより、文化財の保護・普及のために広く一般の方々に活用されることを望んでやみません。

終りに、千葉県立市原園芸高等学校の御協力と千葉県教育委員会(文化課)の御指導・御助言にお礼を申し上げるとともに、調査に協力された調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

1984年 3月

(財)千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

- 1 本書は、県立市原園芸高等学校グランド造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書の内容は、対象地域に所在する雪解沢（ゆきけざわ）遺跡の資料報告である。なお、市原市の市町村コードは216、遺跡コードは026である。
- 3 発掘調査は、県立市原園芸高等学校の委託を受け、千葉県教育庁文化課の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが実施したものである。
- 4 発掘調査は昭和58年10月1日から昭和58年11月30日までの期間、調査部長　白石竹雄、部長補佐　根本　弘、班長　三森俊彦の指導のもとに、調査研究員　加藤正信（昭和58年10月1日～昭和58年10月30日）、同　金丸　誠が行った。
- 5 整理作業及び報告書作成作業は、昭和58年12月1日から昭和59年3月31日までの期間、調査部長　白石竹雄、部長補佐　根本　弘、班長　三森俊彦の指導のもとに、調査研究員　金丸　誠が行った。
- 6 本文の執筆は、金丸　誠が担当した。
- 7 写真図版1の周辺地形の航空写真・付編にあげた資料は、県立市原園芸高等学校所蔵のものを、また写真図版4の瓢箪塚古墳の写真については南總郷土文化研究会所蔵のものを、それぞれの御好意によりここに掲載させていただいた。
- 8 発掘調査から報告書の刊行にいたるまで県立市原園芸高等学校・千葉県教育庁文化課・財団法人市原市文化財センター・南總郷土文化研究会・田中喜作氏・野口博氏をはじめとして、多くの方々から御指導・御助言・御協力をいただいた。深く謝意を表します。

本文目次

序 文

例 言

第1章 発掘調査に至る経緯	1
第2章 発掘調査の方法と経過	1
1. 確認調査	1
2. 亂立塚古墳	1
3. 026-1号跡	2
第3章 遺跡の位置と環境	2
第4章 検出した遺構	7
第1節 確認調査	7
住居跡	7
方形周溝墓	9
乱立塚古墳	9
第2節 本調査	15
026-1号跡	15
Y-1号跡 壺棺	26
第3節 まとめ	29
付編 千葉県立市原園芸高等学校所蔵土器	30

挿図目次

第1図 雪解沢遺跡周辺地形図・主要遺跡分布図	3
第2図 トレンチ配置状況及び遺構検出状況図(1/1,000)	5
第3図 D-8号住居跡出土土器(1/4)	8
第4図 瓢箪塚古墳検出状況図(1/400)	10
第5図 瓢箪塚古墳トレンチセクション図(1/100)	12
第6図 瓢箪塚古墳出土土器(1-1/4・2-6-1/2)	14
第7図 026-1号跡墳丘測量図(1/200)	15
第8図 026-1号跡・S-001号跡平面図および遺物出土状況図(1/200)・セクション図 (1/160)	16
第9図 S-001号跡遺物出土状況図・セクション図(1/40)	18
第10図 026-1号跡出土土器(1/4)	19
第11図 S-001号跡出土土器1(1/4)	20
第12図 S-001号跡出土土器2(1/4)	21
第13図 Y-1号跡(壺棺)平面図(1/10)	27
第14図 Y-1号跡(壺棺)実測図(1/4)	28
第15図 千葉県立市原園芸高等学校所蔵土器1(1/4)	31
第16図 千葉県立市原園芸高等学校所蔵土器2(1/4)	32

図版目次

図版1 遺跡周辺地形 航空写真(千葉県立市原園芸高等学校提供)	
図版2 瓢箪塚古墳 1. 第2トレンチ 2. 同セクション 3. 第4トレンチ	
図版3 瓢箪塚古墳 1. 第1トレンチ 2. 同セクション 3. 第1グリット	
図版4 瓢箪塚古墳旧状全景南西より(南総郷土文化研究会提供)	
図版5 026-1号跡 1. 発掘前全景 2. 3. 同セクション	
図版6 1. 026-1号跡発掘後全景 2. S-001号跡発掘後全景	
図版7 S-001号跡 1. セクション 2. 遺物出土状況 3. 周溝掘り込み Y-1号跡 1~4. 検出状況	
図版8 出土土器 026-1号跡1~6 S-001号跡7~8	
図版9 出土土器 S-001号跡1~5	
図版10 出土土器 S-001号跡1~8	
図版11 Y-1号跡(壺棺)	
図版12 千葉県立市原園芸高等学校所蔵土器	

第1章 発掘調査に至る経緯

今回の発掘調査は、県立市原園芸高等学校のグランド造成に先行して実施されることになった。雪解沢遺跡は古くからその存在を知られており、事前に行われた現地踏査でも、古墳1基の所在を確認し、弥生式土器・土師式土器が採集できた。千葉県教育庁文化課では雪解沢遺跡の取り扱いについて関係機関と協議を重ねた結果、記録保存の措置をとることになり、当センターが発掘調査を実施することになった。

グランド造成の基本的設計では、地山を掘削することなく表土層の移動による造成で実施するとのことであった。このため現地表面上に構築物の残されている026-1号跡については本調査を実施し、その他の部分については確認調査を実施する運びとなった。

また上記のように、地山を掘削しないことなどの、先土器時代の遺物の有無についての確認は実施しないことになった。

第2章 発掘調査の方法と経過

発掘調査は昭和58年10月1日から10月6日までを準備期間とし、実質的作業は10月7日から11月25日まで実施し、実測・写真撮影等のすべての作業は11月30日に終了した。

1 確認調査

調査対象面積11,000m²のうち確認調査対象面積は9,640m²であり、そのうちの10%について調査することになった。調査の方法は、当初より瓢箪塚古墳の所在が予想されていたこともあり、調査区を縦断する長いトレンチによる確認を実施することにした。トレンチの設定の方法は、幅1.0mのトレンチを基本的には南北方向に設定し、調査区内のうち東西の最も長い部分に東西のトレンチを1本設定し、あとは適宜必要に応じて追加設定することにした（第2図）。発掘の方法は期間的な問題も考慮して、特殊なバケットを着装したバックホウによって表土を掘削することにした。バックホウによる掘削の後、人力によって確認面を精査し、遺構の検出に努めた。不確実な落ち込みなどについては、できる限り追加のトレンチあるいは拡張によって、より明確にその性格をとらえることにした。確認調査は10月7日から開始し、10月26日に一応終了した。

2 瓢箪塚古墳

確認調査の進捗に伴い、10月18日の時点で瓢箪塚古墳の存在が確認された。その後、県文化課より瓢箪塚古墳に関してより詳細な資料を得るようにとの要請があり、11月7日に三者協議を行った結果、当初予定の期間内において瓢箪塚古墳に対して、新たに確認トレンチを追加す

ることに決った。

トレーニングの位置は、前方部・後円部の主軸線上に1本ずつ、南側くびれ部に1本、後円部の主軸線に直交する位置に2本の計5本を設定した。更に前方部の両コーナーを明確にするため、それぞれの部分にグリットを設定した。発掘の方法は、トレーニングに関しては現地表面から搅乱土まではバックホウによって掘削し、それ以下は人力で掘削することとした。主軸線上のトレーニング2本とくびれ部のトレーニングは、周囲底面まで掘削したが、後円部の2本のトレーニングは墳丘の上層を検出するにとどめることにした。グリットに関しては確認面まではバックホウによって掘削し、前方部コーナー及び周囲コーナーについては人力によって掘削し検出に努めた。

3 026-1号跡

10月6日・7日の両日に墳丘測量等を実施し、10月8日から実質的な調査に入り、墳頂部にある木の初株をさけて十文字のセクションベルトを設定した。その十文字のセクションベルトを境にI区～IV区に分割し、I区とIII区内にセクションベルトに沿って幅2mのトレーニングを設定し、旧表土面まで掘削していった。以後他の部分について随時掘削を実施していった。また、セクションの実測の後セクションベルトを除去し、最終的にはソフトローム面までの掘削を実施した。また、本跡との関連性を考慮し、北西側に隣接するS-001号跡についても、同時に発掘を行った。

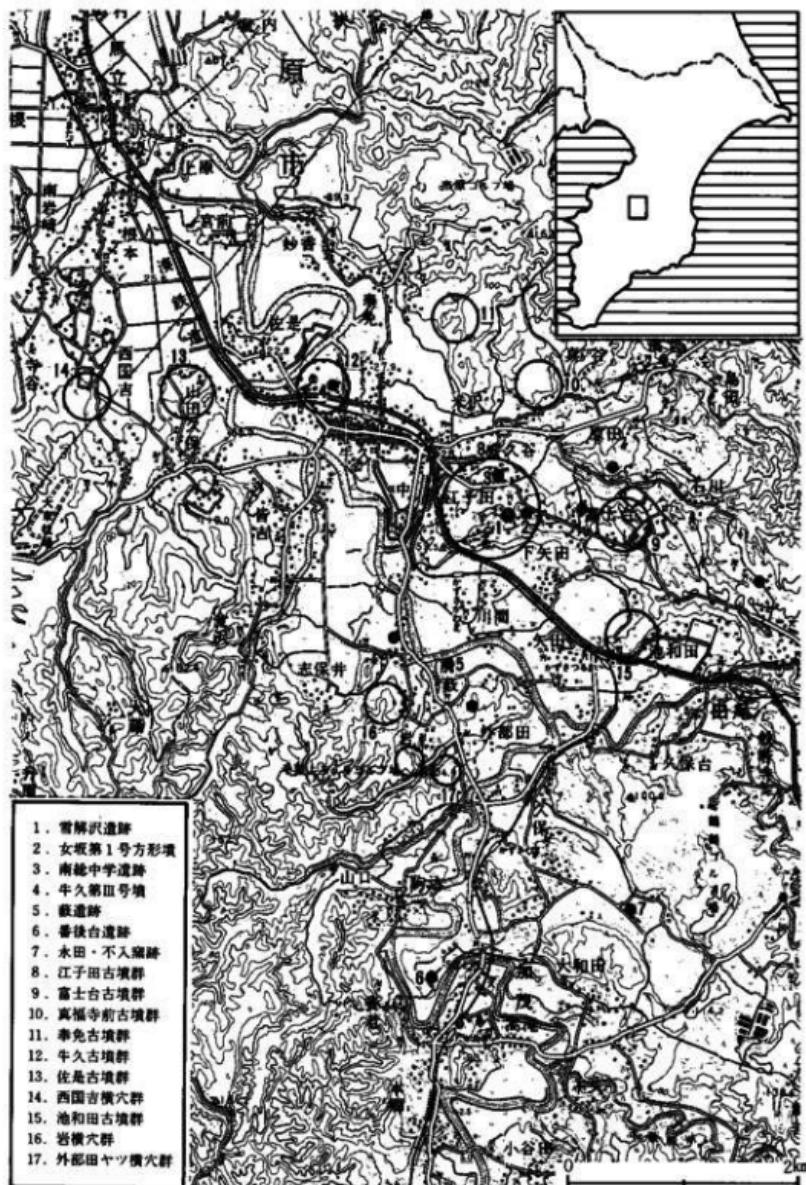
第3章 遺跡の位置と環境

雪解沢遺跡は、清澄山系に源を発する養老川中流域の、養老川とその支流の内田川とによって挟まれた舌状台地上に存在する。本遺跡の所在する台地は、富士台丘陵と呼ばれる台地の西端部にあたり、標高は62m前後を計る。富士台丘陵は、本遺跡の東約500mの地点で北側から谷頭が深く入り込んでいるため、台地の幅を減じて再び扇状に広がっている。

扇状に広がった台地は東西に走る小さな支谷が形成され、あたかも台地が3つに分割されているかの様相を示している。本遺跡の所在する台地は一番南側の台地であり、西に向って最も突き出しているが、先端部は国道297号線によって切断されている。本遺跡の南側は急峻で、現水田面との比高差は25mを計る。

本遺跡の所在する台地からは、養老川の蛇行に沿って形成された牛久・川間・矢田と続く細長い沖積平野を望むことができる。

本遺跡周辺の縄文時代の遺跡は、正式調査の行われた例は少なく、散在地として知られているものが大部分である。本遺跡と同じ台地の東方約0.7kmに原田大六天遺跡（註1）、その北東約0.5kmに白旗台遺跡（註2）が所在している。本遺跡と小支谷を挟んで北方約0.4kmの対岸に所在する南総中学遺跡（註3）には、縄文前期～中期の住居跡が報告されている。東方約2.3



第1図 雪解沢遺跡周辺地形・主要遺跡分布図
(国土地理院発行 1:50,000地形図 N1-54-19-16 緯略)

kmに竜溪寺台遺跡（註4）が、南東約1.5kmに池和田遺跡（註5）が所在している。養老川を挟んだ対岸には、南西約1.4kmに轟遺跡（註6）が、南方約1.6kmに外部田・西台・沖ノ台遺跡（註7）が所在している。最近の報告例では、南方約3.8kmに所在する番後台遺跡（註8）において中期の住居跡が報告されている。

弥生時代・古墳時代の集落遺跡も報告例が少ない。本遺跡の東方約0.2kmの女坂第1号方形墳丘下（註9）には、弥生時代後期末の住居跡が所在している。南総中学遺跡には、弥生時代中期後半～後期後半の住居跡および中期後半の方形周溝墓が報告されている。久ヶ原式土器の壺が発見され、弥生時代から古墳時代の大集落の存在が想定された送り神遺跡（註10）は、本遺跡の北側に隣接する一段下った台地上に所在していた。番後台遺跡においては、弥生時代後期の住居跡および古墳時代前期～後期の住居跡が多数報告されており、養老川上流域における当該期の集落遺跡の調査報告としては唯一のものである。また、同遺跡からは古墳時代前期の方形周溝墓の存在も報告されている。

歴史時代の遺跡についても報告例は少なく、集落遺跡としては、本遺跡の南方約1.3kmの轟遺跡（註11）において9世紀前半の住居跡が報告されている。南総中学遺跡においても住居跡の存在が報告されている。東方約1.5kmに8世紀末～9世紀初頭の須恵器を出す石川窯跡（註12）が、南東約3.5kmにはほぼ同時期の永田・不入窯跡（註13）が所在している。

養老川の流域の丘陵上には幾つもの古墳群・横穴群が知られており、本遺跡周辺も同様である。養老川右岸には、本遺跡をも含む江子田古墳群・北東約1kmには真福寺前古墳群・同横穴群（註14）が所在し、更に北西約1kmには奉免古墳群（註15）が所在する。本遺跡の北西約2kmの微高地上には牛久古墳群（註16）が所在する。本遺跡の所在する台地の奥部にあたる東方約1kmには富士台古墳群（註17）が、南東約1.5kmには池和田古墳群・同横穴群（註18）が所在する。一方、養老川左岸には、牛久古墳群の対岸約1.2kmに佐是古墳群（註19）が、更に西方約1kmには西国吉横穴群（註20）が所在する。本遺跡の南方約2kmには轟横穴群（註21）・更に南方0.5kmに岩横穴群（註22）、同じ台地の東側斜面には外部田ヤツ横穴群（註23）が所在している。

註1・2 「千葉県埋蔵文化財分布図」 千葉県広報協会 1978年9月

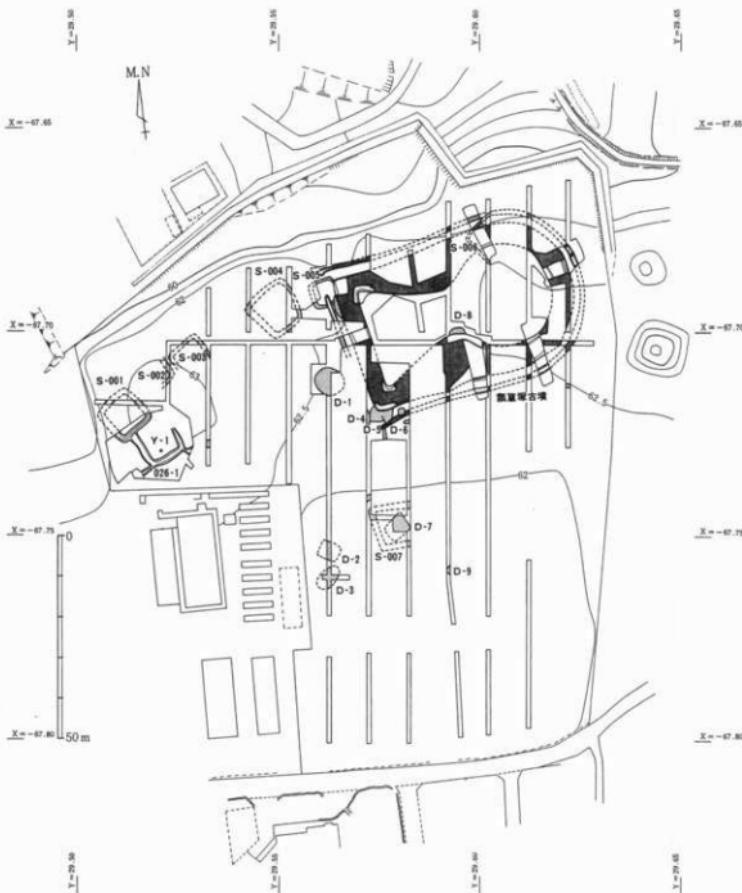
「市原市遺跡分布図」 市原市文化財研究協議会 1971年

註3 倉田芳郎他「千葉・南総中学遺跡」 市原市教育委員会 1978年7月

註4～7 註1に同じ

註8 藤崎芳樹他「市原市番後台遺跡・神明台遺跡」 千葉県土木部 助千葉県文化財センター 1982年3月

註9 武田宗久他「上総国女坂第1号方形墳」「南総郷土文化研究会叢書」第9巻 南総郷土文化研究会 1969年3月



第2図 トレンチ配置状況及び遺構検出状況図 (1/1,000)

- 註10 田中喜作「江子田送り神集落について」「郷土史年表(付史料)」(千葉県市原市南部地区) 小幡重康編 1969年2月
- 註11 石本俊則他「市原市藪遺跡」 市原市藪遺跡調査会 1982年3月
- 註12 註3と同じ
- 註13 大川清「千葉県市原市永田・不入須恵窯跡調査報告書」 千葉県教育委員会 1976年3月
- 註14・15 註1と同じ
- 註16 増田精一他「牛久第III号墳調査抄報」「千葉県埋蔵文化財抄報」3 千葉県教育委員会 1972年3月
- 註17 註1と同じ
- 註18 「鶴舞町池和田横穴」「史蹟名勝天然記念物調査」 千葉県 1929年3月
- 註19 註1と同じ
- 註20 杉山善作他「千葉県市原市西国吉横穴群」 西国吉横穴群発掘調査団 1972年
- 註21 註1と同じ
- 註22 野中徹他「岩横穴群発掘調査報告書」岩横穴群発掘調査団 1977年3月
- 註23 「高瀬村外部田横穴」「史蹟名勝天然記念物調査」第六輯 千葉県 1929年3月
内藤政光「下総国外部田の横穴に就きて」「考古学雑誌」第19巻 第2号 1929年2月

第4章 検出した遺構

第1節 確認調査(第2図)

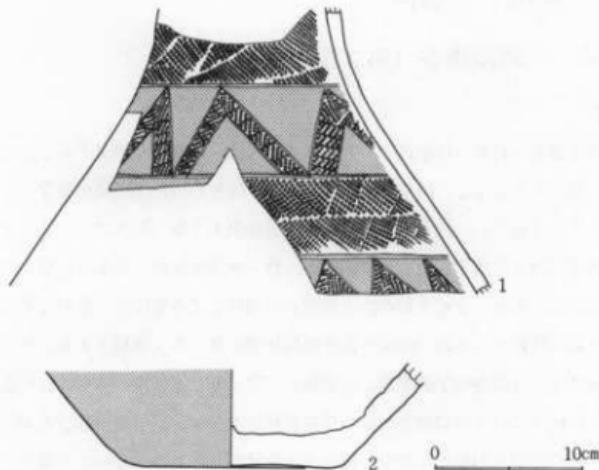
住居跡

今回の確認調査の結果、住居跡と考えられる落ち込みは9ヶ所検出することができた。規模を明確にし得たものではなく、時期についても遺物を採集し得た住居跡が少なく、すべてについて断定することは難しい。図示したD-8号住居跡出土土器(第3図)のうち1の土器は、瓢箪塚古墳の周堀内より出土したものであるが、D-8号住居跡が瓢箪塚古墳の周堀によって半分程度破壊されており、また土器の出土状況から判断して本跡に伴うものと考えてよいかと思う。この土器の特徴から本跡の時期を弥生時代後期中葉の久ヶ原期とすることができる。D-1号住居跡はその住居跡の平面形態から判断し、D-8号住居跡の時期に近いものと考えられる。他の住居跡については時期を決定し得る資料に乏しいが、平面形態が方形に近くなるものと思われ、またカマドの存在を想定し得る状況を見出したものがないことなどから、D-8号住居跡などより新出の弥生時代後期末～古墳時代前期に比定し得るものと考えられる。

遺構の分布状況は、調査区の中央部から北部にかけて南北にやや細長い範囲においてみられ

る。ただし北西部の026-1号跡付近は旧地形が破壊されており、また北東部分は瓢箪塚古墳の周囲の掘削の際破壊されたことも考えられ、一概にこれらの地区に全く存在していなかったとは言い難い。調査区の北側に隣接する一段低い地区には宅地造成の際に住居跡の存在が確認されているし、同じく西側に隣接する一段低い地区では弥生式土器や土師器の破片を多数採集することができることから、住居跡の存在が想定できる。

D-8号住居跡出土土器(第3図)1は壺形土器で、頸部から胸部上位まで約1/2程度残存している。色調は明褐色で、胎土は石英粒・小石を多量に含み焼成は良い。文様帶は現存の状態で3本の沈線によって4段に区画されている。上から順に第1段目の頸部の文様帶は、RLの斜行繩文を施す。第2段目の文様帶は大きな山形文を構成し、更に山形文の内部は沈線によって6~7区画に分割されている。地文はRL繩文を方向によって向きを変えて施している。第3段目の文様帶は、RLの斜行繩文を2段施す。第4段目の文様帶は全体を知ることはできないが、おそらく鋸歯状の山形文を構成するものと思われる。地文はRL繩文を方向によって向きを変えて施している。施文部分以外はヘラミガキを施し赤彩されている。2は、住居跡の覆土上面より出土したものである。壺形土器の底部で、径は15cmを計る。色調は明褐色で、胎土は石英粒・小石を多量に含み、焼成はやや不良である。内面の器面は剥落が著しい。外面はヘラミガキを施し赤彩される。おそらく1の底部にあたるものと思われる。



第3図 D-8号住居跡出土土器(1/4)

方形周溝墓

方形周溝墓と考えられる溝状の落ち込みは7ヶ所検出することができた。7基の方形周溝墓のうちS-001号跡については、026-1号跡の調査にあたりその関連性を知る上で一部周溝を発掘したので、026-1号跡の項で記述することにする。

S-001号跡～S-005号跡は北向きの台地縁辺部に沿って向きをほぼ同じくして存在している。S-002号跡は西側の台地縁辺より北東に15m～20m程の地点に存在する。検出できたのは南東部のコーナー付近だけであるので規模は不明である。S-003号跡はS-002号跡から1m程の距離を置いて存在する。規模は推定で東西約9m・南北約10mのほぼ正方形であると思われる。S-003号跡から約13m程北東の地点にS-004号跡が存在する。平面形はやや不整形であるが、規模は推定で東西約12m・南北約12mを計る。S-004号跡の北東に約3m程の距離を置いてS-005号跡が存在する。周溝の南側一部と東側の大部分を瓢箪塚古墳の周堤によって破壊されている。規模は南北は約7m、東西は推定で約7mのほぼ正方形である。S-005号跡から更に35m程北東にいった地点にS-006号跡が存在している。2辺の一部を検出しただけであるが、大部分を瓢箪塚古墳の周堤によって破壊されていると思われる。規模は不明であるが、S-004号跡に近いものになるのではないかと思われる。S-005号跡とS-006号跡とは距離が他と比べ随分離れているが、その間は瓢箪塚古墳の周堤があり、周堤掘削の際に破壊された可能性が考えられる。S-007号跡はS-004号跡の南東50m程の地点に他の方形周溝墓とは離れて存在している。発掘範囲のはば中央部で台地の縁辺からは65m程南に入った地点である。遺構の構築されている向きが他のものと異なり、より磁北に近い向きを示している。規模は推定で東西約12m・南北約11mで、やや菱形に近い平面形をしているものと思われる。検出した方形周溝墓は以上であるが、026-1号跡の周溝の南東コーナー部から外側に延びている溝と、すぐ東側のトレンチで確認できた溝の存在から、あるいはこの地点にも方形周溝墓が存在している可能性が考えられるが、確証を得る手段を講じることができなかった。

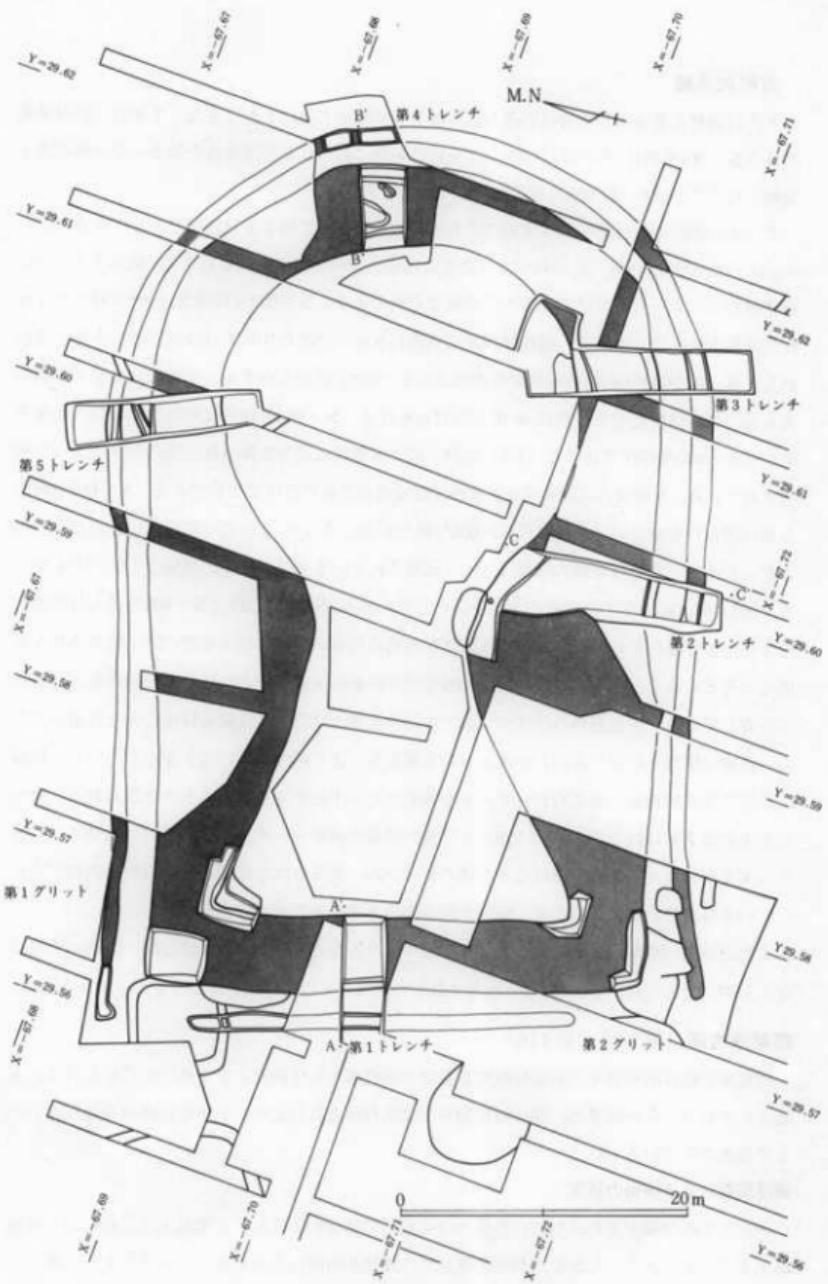
方形周溝墓の時期は、台地上における占地のあり方などからすべてがほぼ同一時期の所産になるものと考えられ、S-001号跡出土土器から判断して古墳時代前期と考えてよいかと思う。

瓢箪塚古墳（第2図・第4図）

瓢箪塚古墳は昭和38年に千葉県教育委員会と南總郷土文化研究会を主体として発掘調査が実施されており、その結果の一部は昭和39年千葉県教育委員会より「千葉県遺跡調査報告書」として発表されている（註）。

確認調査による検出の状況

トレンチの発掘が進むにつれ、発掘区の北東部で確認面上における擾乱土の存在を数ヶ所確認することができた。しかし当初その擾乱土の性格を明確にとらえることができず、一部バッ



第4図 瓢箪山古墳検出状況図 (1/400)

クホウによって壺掘りを行った。その結果、擾乱土の下1m程のところから遺構の覆土と思われる土層を確認することができた。昭和39年の瓢箪塚古墳に関する報告の中の墳丘測量図を見ると、周塙の部分は50cm前後の窪地となっていることが分り、墳丘は当時の発掘調査終了後にすべて削平されたとのことである。これらのことからこの擾乱土は墳丘を削平した際に、当時窪んでいた周塙の部分に充満した墳丘の盛土であると判断した。

この範囲を図面上に投影することによってはじめて瓢箪塚古墳の概略をつかむことができた。そして、より明確にその範囲をとらえるために、バックホウを使って前方部の北側および後円部の一部を確認面まで掘削することにした。その後のトレンチ調査の経緯等については前章で述べた通りである。

位置と現状（第2図）

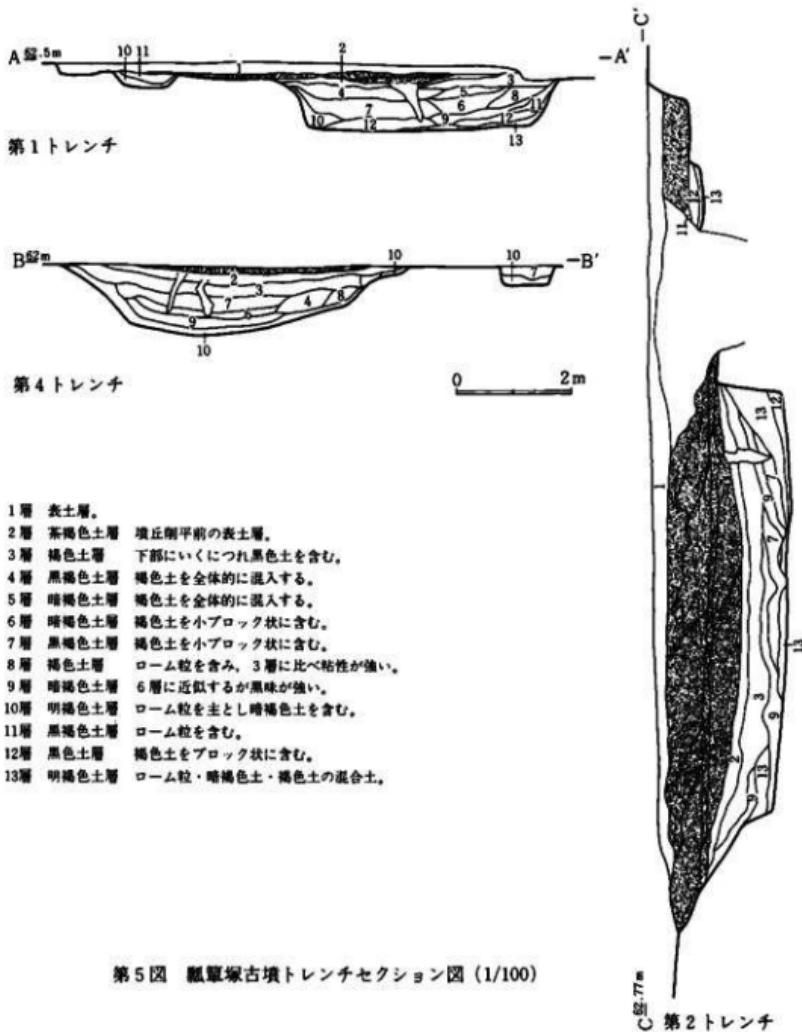
位置は台地の北側に偏し、台地の縁辺と主軸方向をほぼ一致させる形で存在している。確認トレンチの結果から、旧地表面およびローム面は、古墳の北側は外側周塙の地点から急激に傾斜し谷へ続いていることが明らかとなった。古墳の西側には方形周溝墓が続き、東側の現在林となっている部分には、多数の円墳・方墳の存在が確認されている。

古墳の存在する地域はほぼ平坦であり、南側は周塙を過ぎてなだらかに傾斜し、調査区の境となっている道路付近から再び緩かに標高を増してくる。西側は現状においても調査範囲内では最も標高が高いが、確認トレンチの結果から、旧地形が著しく削平されていることが分かり、旧地形においては自然の小山状になっていたものと思われる。墳丘はすべて盛土によって構築されていたとのことであるので、それらの地域をあえて避けて古墳の占地が決められたものと思われる。墳丘は、昭和38年の発掘調査の後すべて削平され、現在は全くその痕跡をとどめない。

墳丘と規模（第4図・図版4）

墳形は、前方部を座標北から108°西に向ける前方後円墳である。墳丘は、削平されてすでにないが、報告によると前方部高・後円部高とともに4.5mと全く等しい（図版4）。主軸長は46mを計り、前方部幅は24.8m、後円部径は25mとほぼ等しい数値を得ることができた。後円部径と前方部長の比率は1:0.84となる。後円部は整円に近いが、前方部は北側の角度が70~75°、南側の角度が60~65°と均整を欠いている。

周塙は盾形をしており、今回の調査によって、外側に更にもう1本周塙が廻る二重周塙の形をとることが明らかになった。内側の周塙の幅は、前方部と後円部では約5m、くびれ部で約11mを計る。深さは、前方部の第1トレンチでは89cm前後、くびれ部の第2トレンチでは1.8m~1.9m、後円部の第4トレンチでは最深部で1.2mを計る。周塙底面まで完掘しなかったが、第3トレンチでは1.4m前後、第5トレンチでは90cm前後を計る。このことから、北側の台地縁辺に接する部分では比較的浅く、南側がそれに比べ深くなっている、特にくびれ部分が最も深



第5図 瓢箪塚古墳トレンチセクション図(1/100)

52.77m
C 第2トレンチ

くなっている。周囲の掘り込みは、底面まで掘り下げた第1・第2・第4トレンチを見ると(第5図)、第1・第2トレンチと第4トレンチとではその様相を異にしていることが分る。第1・第2トレンチでは、周囲底面はほぼ平坦で、外側の立ち上りは75~80°の角度ではなく直線的に立ち上っている。しかし、墳丘側の立ち上りは、第1トレンチでは60°程度の角度ではなく直線的に立ち上るが、第2トレンチでは一旦60°程度の角度で直線的に立ち上り、更に明瞭な棱を作り出

して、立ち上りの角度を35°程度に変え墳丘へと続いている。底面まで掘り下げなかった第3・第5トレンチについては、第2トレンチに近い掘り方をしていた。第4トレンチでは底面は中央部がやや深くなってしまっており、外側の立ち上りは下場がやや不明確でありだらだらと立ち上っていく。墳丘側は50°前後の角度でややふくらみを持って立ち上る。第1・第2グリットの周囲外側の立ち上りは鋭角で直線的に立ち上り、深さは第1グリットのコーナー部分で40~50cm、第2グリットのコーナー部分で70cm前後を計る。コーナー部分はどちらも矩形に近い形を作り出されている。前方部の北側コーナー部分（第1グリット）は底面から一段ステップを作り出している。深さは80cm前後を計る。南側コーナー部分（第2グリット）は直線的に立ち上り、深さは60~70cmを計る。

外側の周囲は、内側の周囲から1.5~2mの間隔を置いて内側の周囲に沿って廻っている。

幅は1.2m前後で、深さは30cm前後と浅く、堀と言うより溝と言った方がふさわしい規模のものである。周囲は全周せずに前方部のコーナー部分でブリッジ状に跡切れる。第1グリットでは明確にその状況をとらえることができたが、第2グリットでは前方部側の周囲を検出することはできなかった。しかし、後円部から続いてきた周囲が前方部のコーナー部分で跡切れる状況が認められ、第1グリットで検出したと同様な様相を示すものと考えられる。掘り込みの状況は、底面はほぼ平坦で、立ち上りは直線的で比較的鋭角に立ち上っている。

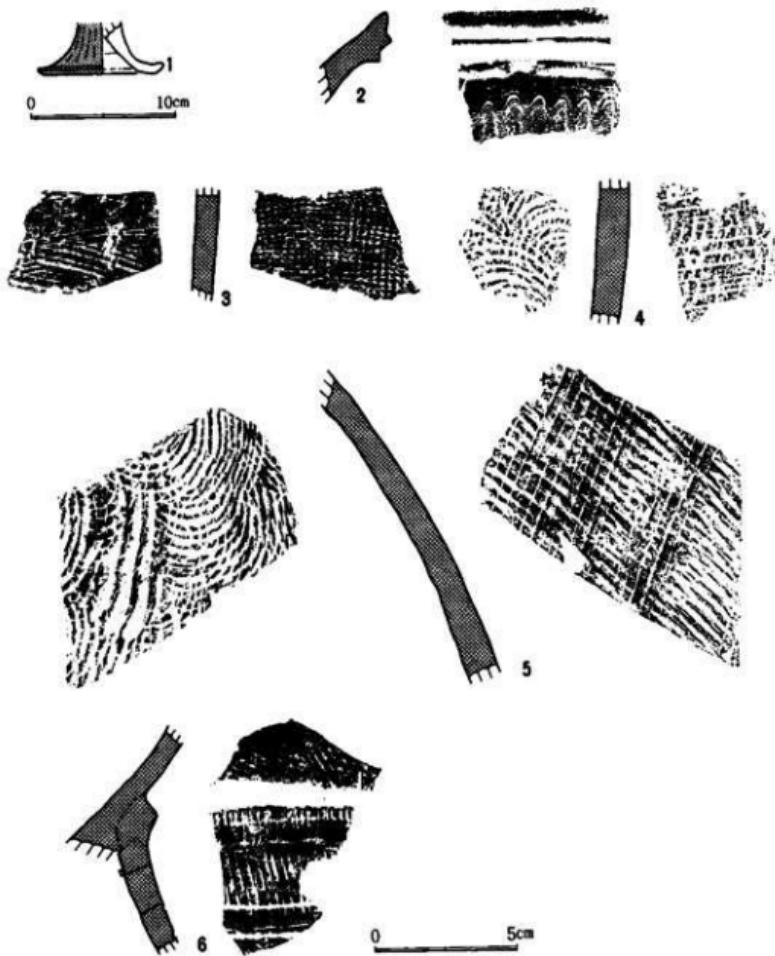
周囲内に充満している土層は、暗褐色土と黒褐色土が主体を占めており、底面は、深いものは下末吉粘土層に達しており、下層土は粘性を強く帯びている。セクション図中のスクリーントーンで示した土層は、墳丘を削平した際の墳丘の盛土に当る部分であり、その時点までに堆積した土層は80cm~1m程のものである。

出土遺物（第6図）

1は高杯形土器で脚部のみ2/3程残存している。現存高は3.7cm、裾径は8.7cmを計る。色調は明褐色で、胎土は赤色粒子を含み、焼成は良い。脚柱部内外面はヘラケズリ、裾部内外面はナデによる整形を行う。外面は赤彩される。出土地点は第1グリットの内側周囲内の墳丘に寄った地点であり、出土状況は底面には密着していた。

2~6は周囲内からの出土ではなく、第2グリットの確認面上より採集したものである。第2グリット内において検出した遺構の中には、これらの遺物の示す時期に該当すると思われるものがなく、本古墳と関連を有する遺物としてここに示すこととした。

2~6はいずれも須恵器であるが、全体を窺い知ることのできるものはない。2は壺の口縁部である。表面の色調は青灰色で、断面内側はセピア色である。胎土は白色の小石を含むが焼成は良い。口縁部下に単位12本のクシ描き波状文を施す。3~5は甕の胴部と思われる。胎土・色調・焼成ともに2に近似する。3は、外面は格子状のタタキ技法を施し、内面はヘラ状工具によるナデ調整を行う。4は、外面は3よりやや粗い格子状のタタキ技法を施し、内面は青海



第6図 瓢箪塚古墳出土土器（1-1/4・2-6-1/2）

波文が見られる。5は、外面はタタキ技法の後、タタキ目の方向に直交するようにナデを行う。内面は青海波文が見られる。6は、器台の接合部分で、色調は青灰色で断面内側は淡黄灰色を示す。胎土は白色砂粒を含み、焼成は良い。器受部外面はタタキ目の後ヘラナデを行い、脚部はタタキ目を残す。接合部の断面三角形の凸帯はヘラ状工具によるきざみ目が施される。器受部の内面は剥落が著しい。

註 武田宗久「南總町江子田瓢箪塚古墳」『千葉県遺跡調査報告書』 千葉県教育委員会

1964年3月

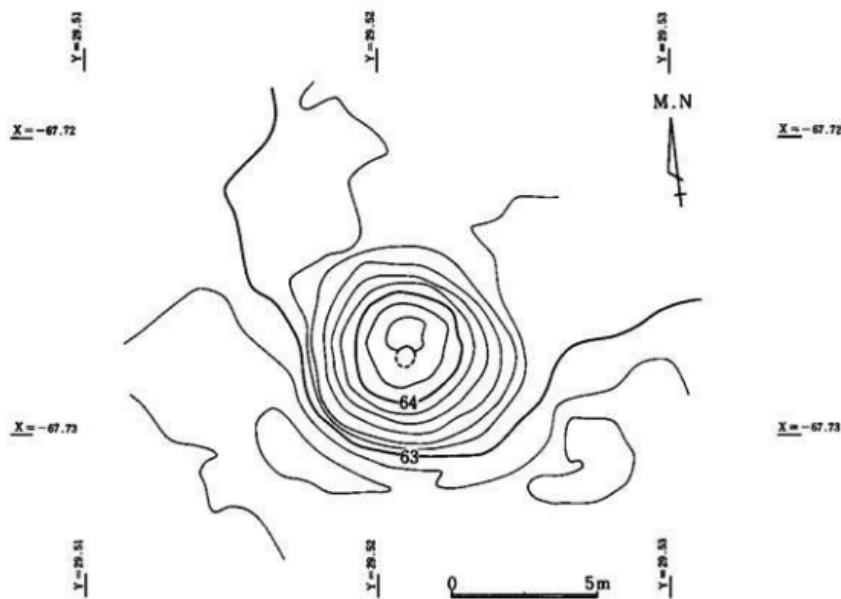
上記の報告書の中で「新たに「江子田金環塚」と銘名」されているが、以後も瓢箪塚古墳の名称が主流を占めており、本書でも瓢箪塚古墳の名称で統一した。なお、近々正式な報告書が市原市より刊行される予定であるとのことである。

第2節 本調査

026-1号跡

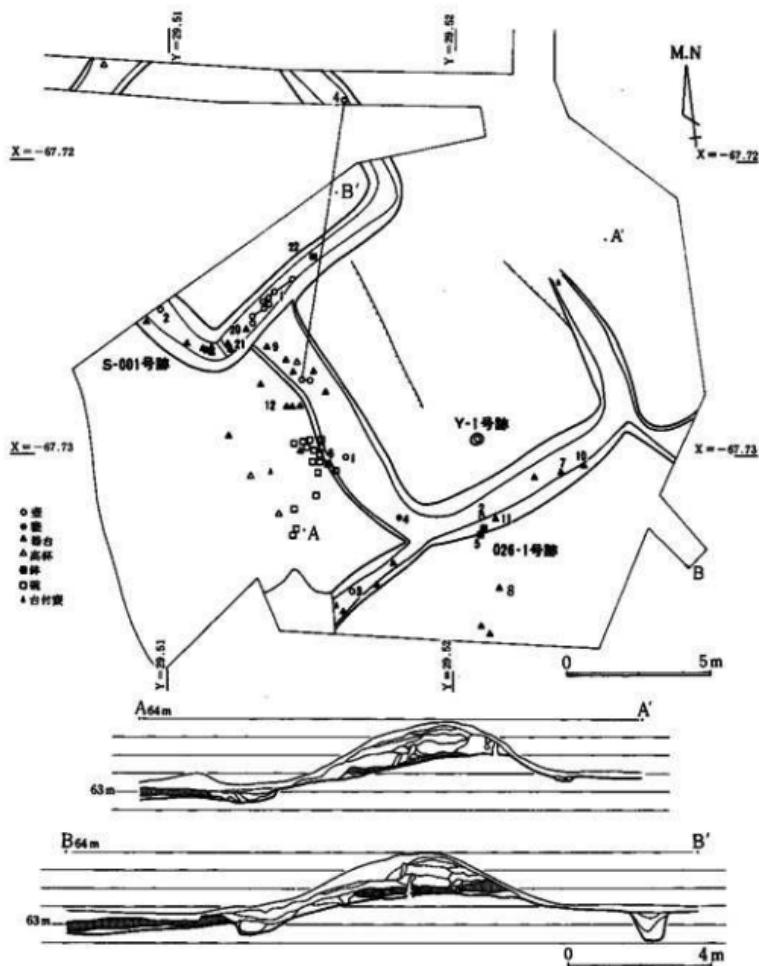
位置と現状（第2図・第7図）

調査区の北西端に位置する。本遺跡の所在する台地においては最も標高が高い地点にあたり6.3m前後を計る。本遺構の位置する地点の西側には、本台地の北側にひらける谷津から延びる小支谷が小さく入り込んでいる。比高差は2m前後で比較的平坦面が続き、支谷というよりもしろ台地が一段下がるといった方がふさわしいかも知れない。本遺構の北側には台地縁辺部に沿って方形周溝墓が一列に続いている。北東45mに瓢箪塚古墳が存在している。南側は調査区外であり、また現在建物が建っているため遺構その他については不明である。先にも述べたが、



第7図 026-1号跡墳丘測量図 (1/200)

本遺構の存在する地点は本遺構の北側から北東側にかけての径20m前後の範囲において、現状で下末吉粘土層下の砂層が露出している。本遺構の調査結果から得られた旧表土層の状況などから考えて、この地域は、本来は現状よりも1m前後地表面が高かったものと思われる。本遺構は、頂上部に大木の切り株が残されており、この木の存在によりかろうじて周辺部だけ削平からまぬがれたものと思われる。



第8図 026-1号跡・S-001号跡平面図および遺物出土状況図(1/200)・セクション図(1/160)

規模と墳丘（第7図・第8図）

調査前の段階では小形の円墳と考えていたが、測量の結果、高さ約1.5m・径約8mを計り、南西側の形状からして方墳の可能性が考えられた。発掘調査の結果、周溝を方形に廻らすが、北東コーナー部分は削平により消滅していた。また、南西側の周溝は本跡北西側に隣接するS-001号跡の南東側の周溝に接続し、北西側については本跡独自の周溝を検出できなかった。

規模は、東西約11m・南北はS-001号跡の周溝の内側まで約12mを計る。周溝の幅は辺の中央部でややふくらみ1.8~2mを計り、コーナー付近では1.5mを計る。S-001号跡の周溝に接続する部分でもやや広がっている。

深さは、削平をほとんど受けていないと考えられる南東側で60cm前後を計り、掘り込みも明確である。南西側は、ここもあまり削平を受けていないと思われるが、深さは20~30cmで、外側の立ち上りは全体的にやや不明確である。北東側の掘り込みは明確であるが、北側に行くにつれて深さを減じ、削平によって途中で消滅している。

周溝内覆土は3層に区分できたが、黒色土層とローム崩壊土層に2大別することができる。南東コーナーと南西コーナーにそれぞれ更に外側に延びる溝が存在している。本跡との新旧関係はいずれも明確にし得なかった。

本跡の北西側に隣接するS-001号跡は、本跡とは同一方向を向いて存在している。S-001号跡については遺構のすべてについて調査を行わなかったので、北側と西側のコーナーおよび南東側を除く各辺の一部については未検出のままである。規模は、推定で東西約11m・南北約11mを計る正方形で、各辺とも比較的直線的である。周溝の幅は1.2~1.5mで、深さは東・南側辺で70~80cm、北側辺で10~30cmと浅くなっている。周溝底面は、東側から西側にかけて斜面の傾斜に合わせたかっこうで傾斜している。掘り方は、断面形で逆台形を示ししっかり掘り込んでいる。検出した北側辺の周溝は斜面中であり、東側辺とは確認面での比高差は1m前後を計る。周溝内の覆土は、上部は黒色土で下部は砂と粘土の混合土が主体となる。確認トレチによる断面観察の結果、台状部には盛土等の痕跡は全く見られなかった。

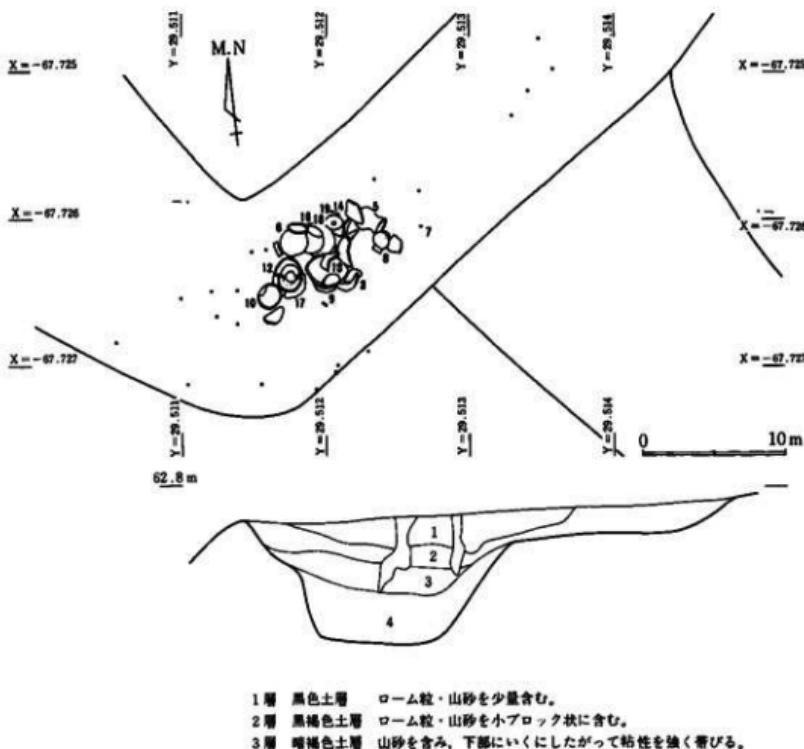
026-1号跡の墳丘部はすべて盛土によって構築されている。旧表土面は南西から北東に向って高まりを見せており、盛土による墳丘部の高さは90cm前後を計る。旧表土層は15~20cmの厚さで残存し、以下は茶褐色のローム漸移層を経てローム層になる。盛土は、基本的には褐色土・暗褐色土・明褐色土の3層に区分することができ、いずれの土層にもローム粒・ロームブロックを混入し、山砂を含む部分もある。盛土の方法は、全体の方法については不明であるが、墳丘中央部と墳裾部を交互に2~3m前後の範囲で水平に積み上げていったものと思われる。地山成形は行っていないものの、ある程度自然地形を利用して、実際に盛土したより高く見せることを意図していたものと思われる。

026-1号跡とS-001号跡との関係は、両者の周溝の接する地点のセクション（第9図）を

観察すると、一周溝の深さが両者では大きく異なるため一概に判断はできないが— 3層の暗褐色土と4層の褐色土はS-001号跡の周溝内覆土としての堆積状況を示しているが、1層の黒色土と2層の黒褐色土は026-1号跡とS-001号跡の共通の周溝内覆土として堆積している状況を見ることができる。また、周溝の形態等にも両者には明らかな差異が存在している。これらのことから、S-001号跡が先行して存在し、ある程度周溝が埋った時点で、まだ灌みとして残っている周溝を利用して026-1号跡が構築されたと考えるのが妥当ではないかと考える。

出土遺物（第10~12図）

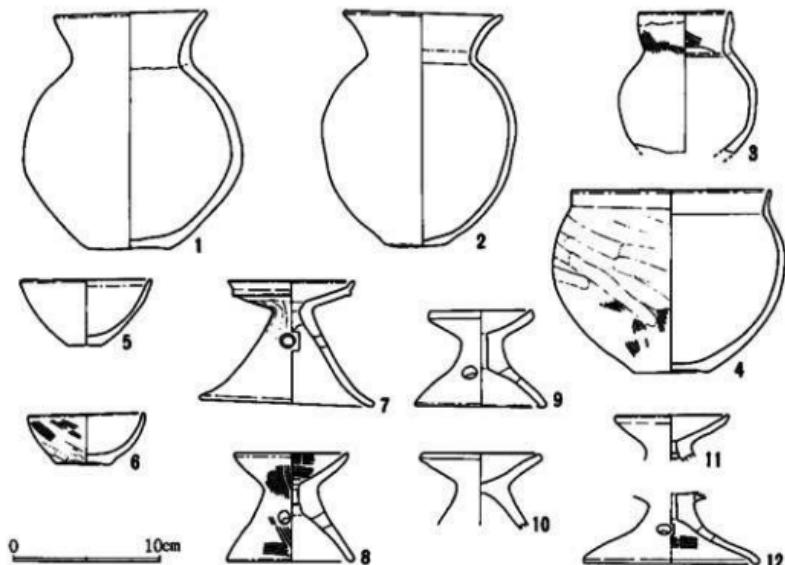
026-1号跡とS-001号跡の遺物の出土状況は第8図に示した通りである。ここには主な土器だけを図示したが、この他に1,000余個の變形土器の破片が出土した。両遺構に共通して言えることは、變形土器の出土数が極めて多く、しかも大多数が平底のものであり台付のものは図



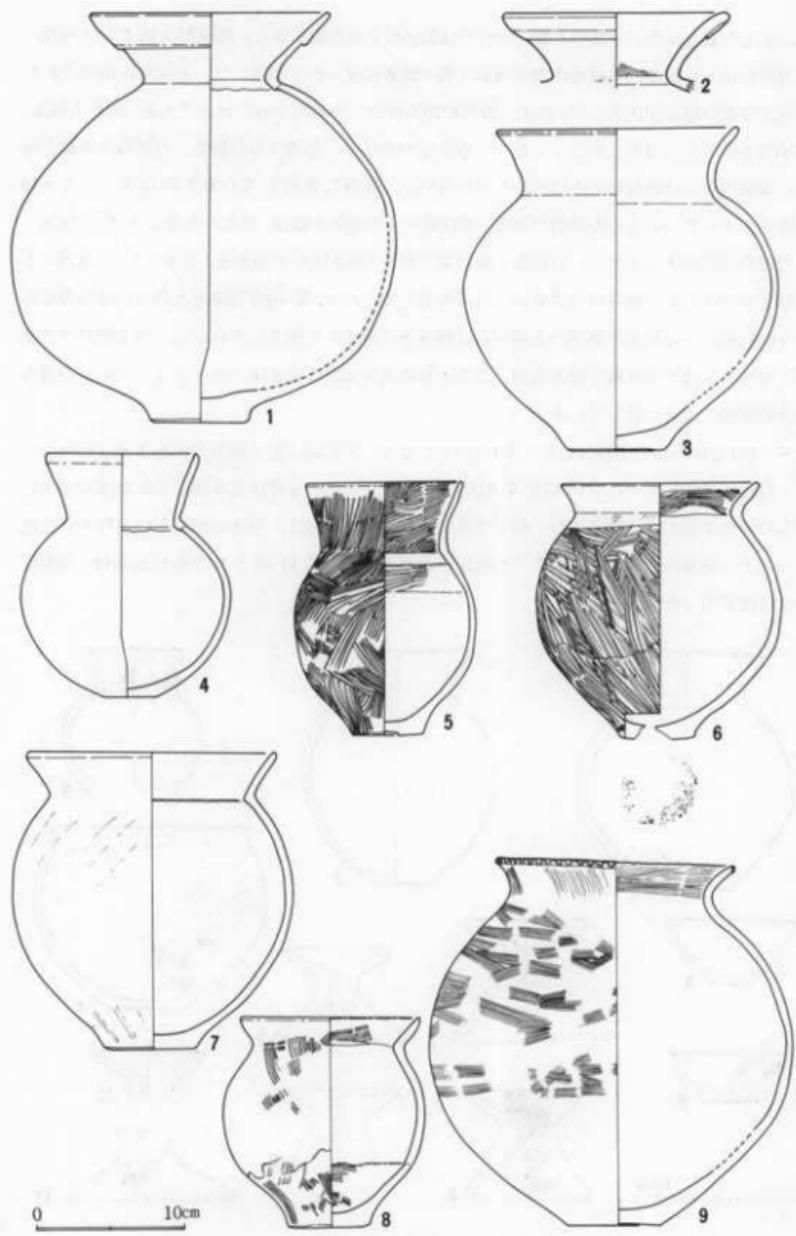
第9図 S-001号跡遺物出土状況図・セクション図(%)

中に示した数しかない。變形土器を除いては器台形土器の数が多く、高杯形土器は少い。026-1号跡の出土状況は、周溝南西側の碗形土器が顕著に見られる範囲には、意図的に破砕された状況で多数の破片が出土した。出土土器の約70%程がこの範囲からの出土である。碗形土器は、図示できるものに復原し得なかつたが、器壁はやや厚く、色調は明褐色で、内外面に赤彩を施す。周溝内からは比較的完形に近いものが多いが、底面に密着しているものは少く、5-10cm程浮き上っているもののが多数である。第11図-4の壺形土器は、胴部～底部にかけては026-1号跡の周溝内より出土し、口縁部～頸部までがS-001号跡の周溝内より出土した。026-1号跡より出土した土器片は周溝底面にはば密着していたが、S-001号跡出土のものは周溝底面より60cm程浮いた状況（周溝の上面からは20cm下の地点）で出土している。この1例だけでも証左とすることはやや危険ではあるが、この土器の出土状況は第9図のセクションで見た周溝内覆土の堆積状況と一致している。

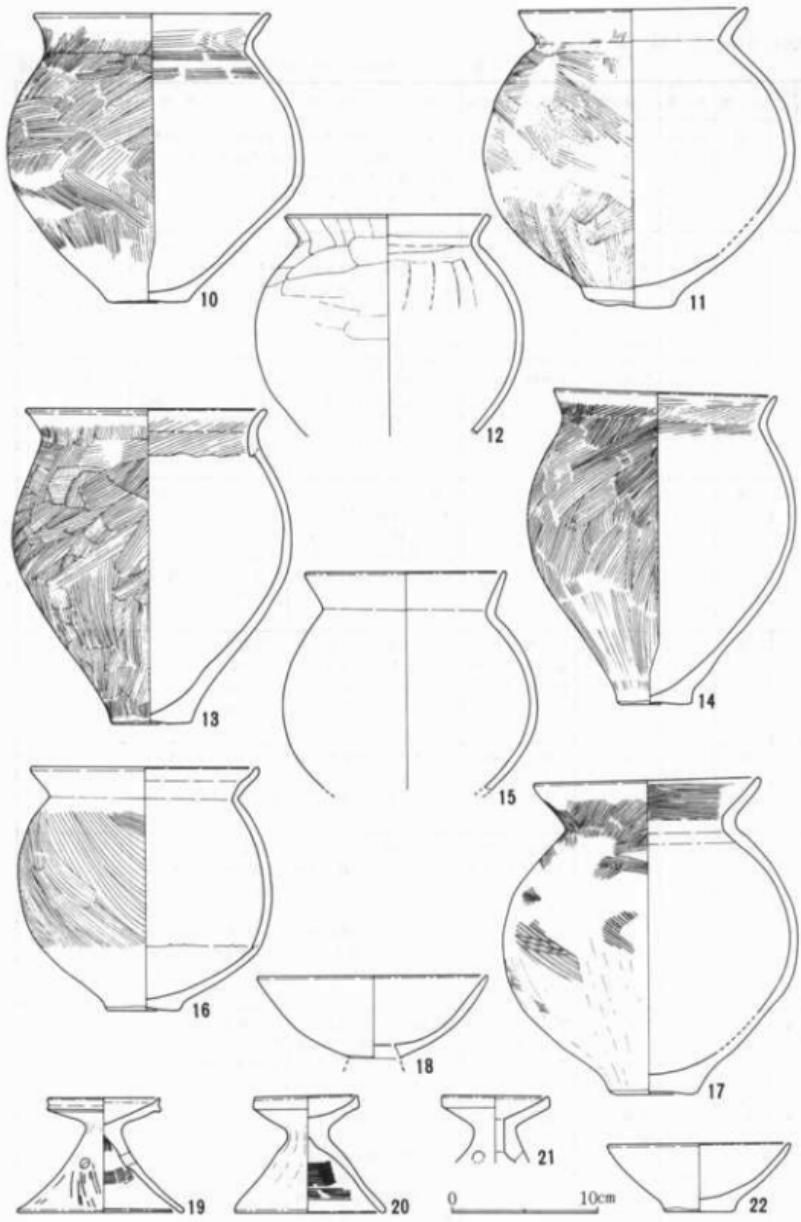
S-001号跡の出土土器は総数で384点出土したが、完形品に近く図示できた土器は南北コーナー付近に集中していた（第8図・第9図）。特に、コーナー部分は第9図に示した様に図示したものの大半がこの地点より一括して出土した。出土状況は、周溝底面から15cm程浮いた地点から上へ30cm程の間に重なり合った状況を示している。第11図-1の壺形土器は、周溝底面にはば密着した状況で出土した。



第10図 026-1号跡出土土器 (1/4)



第11図 S-001号跡出土土器 1 (1/4)



第12図 S-001号跡出土土器2 (1/4)

026-1号跡出土土器一覧

法量：口径×器高×底径。単位cm。（ ）推定、（ ）現存

標本番号	器種	法量	遺存度	色調・胎土・焼成	器形の特徴	成形・調整	備考
1	壺	10.4 15.6 6	口縁部一部 欠損。	赤褐色。小石・砂 粒を含む。良。	口縁部はやや外反ぎみに 立ち上る。胴部はいくぶん 張り、最大径は胴部中位 にある。底部はやや大き く、安定感がある。	口唇部はナデ。胴部内 面は剥落が著しく不 明。それ以外はヘラミ ガキ。	最大径14.8cm。
2	壺	(10.8) 15.7 4.2	口縁部1/4欠 損。	明褐色。小石を 多く含む。良。	口縁部は「く」の字状に外 反する。胴部はあまり張ら ず、卵形である。底部は若干 凸状を示す。最大径は胴 部中位にある。	胴部内面はヘラケズリ。 胴部内面はナデ。底部 を除くそれ以外はヘラ ミガキ。	最大径13.3cm。 底部は磨滅が著 しい。胴部内面 は剥落が著し い。
3	小形壺	6.3 (9.5) —	口縁部一部 欠損。	赤褐色。小石・石 英細粒を含む。 良。	口縁部は内湾ぎみに立ち 上る。頭部はあまりしまら ず、胴部もあまり張ら ない。最大径は胴部中位に ある。	口唇部はナデ。口縁部 内面と胴部中位以下 の内面はヘラナデ。胴部 上位の内面は指頭によ るおさえ。外面は粗い ハケ目の後ヘラミガキ。	最大径9.3cm。 胴部下位以下は 人為的に欠損。
4	壺	13.5 12.2 5	ほぼ完形。	明褐色。小石を 含む。良。	口縁部は短くわずかに外 傾する。頭部はほとんどし まらず、胴部もあまり張ら ない。底部は若干上げ底ぎ みである。最大径は胴部中 位にある。	口縁部はナデ。内面は、 胴部上位がヘラナデ。 中位以下はヘラミガキ。 外面はやや粗いハケ目 の後ヘラナデ。底部は ヘラケズリの後ヘラナ デ。	最大径15.7cm。
5	鉢	9 4.4 2.4	1/6欠損。	外面明褐色・内 面赤褐色。比較 的いた密。良。	平坦な底部から体部は内 湾ぎみに開き、口縁部はそ のままわずかに外反する。	口縁部内外面はナデ。 体部内外面はヘラミガ キ。底部はヘラケズリ による面取りによって 作り出す。	
6	鉢	8 3.4 3.8	口縁部1/4欠 損。	赤褐色。赤色粒 子を多く含む。 やや良。	やや突出した底部から体 部は内湾しながら立ち上 り。そのまま口縁部に続 く。	口唇部はナデ。体部内 面はヘラミガキ。体部 外面はハケの後ヘラナ デ。	
7	器台	8.6 8.3 裾径 11.9	裾部1/4欠 損。	明褐色。赤色粒 子・石英粒を含 む。良。	器受部は接合部から直激 に大きく開き、口縁部は外 面に明瞭な壁を作り、「く」 の字状にくびれてやや内 湾ぎみに開く。脚柱部は 「八」の字状に開き、裾部 で更に開く。3孔。	口縁部内外面はナデ。 内面・接合部～脚柱部 外面はヘラケズリの後 ヘラミガキ。脚柱部内 面～裾部内外面はナ デ。接合部内面はヘラ ケズリによる面取りを行 う。	器受部～裾部外 面にかけて直接 火を受けた様子 が見られる。
8	器台	(7.8) 7.3 裾径 (8.7)	2/3欠損。	明褐色。石英・白 色砂粒を含む。 良。	器受部と裾部は、それぞれ 内湾ぎみに開き、「X」字 状の形体を示す。3孔。	口縁部内外面・脚柱部 内面はナデ。器受部内 面・脚柱部外面はハケ目。	
9	器台	7 6.5 裾径 (9)	裾部2/3欠 損。	灰色。砂粒を含 む。良。	器受部は接合部からわざ かに内湾ぎみに大きく開 き、口唇部端は断面が三 角形になる。脚柱部はやや 太く、裾部になってやや内 湾ぎみに「八」の字状に大 きく開く。3孔。	全体的にヘラミガキ。	

10	器台	8 < 4.9) —	脚部中位以下欠損。	赤褐色。砂粒・小石を含む。良。	器受部は大きくやや直線的に開き、口唇部端は断面が三角形になる。脚柱部は緩やかに「ハ」の字状に開く。孔は不明である。	脚柱部内面はヘラナデ。それ以外はヘラミガキ。	器受部の底部付近は磨滅が著しい。
11	器台	7.8 (3) —	器受部/脚部欠損。	明褐色。赤色砂粒を含む。やや不良。	器受部は大きくやや直線的に開き、口唇部でわずかに内湾する。孔は不明である。	ヘラミガキ。	
12	器台	— < 4.9) (12)	器受部・脚部/5欠損。	明褐色。砂粒・小石を含む。良。	脚柱部は太く緩やかに「ハ」の字状に開き、脚部で更に大きく開く。底部端は丸く終る。3孔。	器受部内面・脚部外面はヘラミガキ。底部内面はナデ。脚柱部内面はハケ目の後ナデ。	

S-001号跡出土土器一覧

法量：口径×器高×底径、単位cm、()推定、< >現存

標印番号	器種	法量	遺存度	色調・胎土・焼成	器形の特徴	成形・調整	備考
1	壺	16.5 27.8 6.8	口縁部1/2、 脚部・底部 一部欠損。	赤褐色。白色・赤色の微細粒を含む。良。	口縁部は復合口縁で、頸部から強く外傾し、口唇部端は面を作る。脚部は張り突出した底部へ続く。最大径は、脚部下位にある。	ヘラミガキの後。全面にわたって化粧土をねる。	最大径26.3cm。
2	壺	15.6 — —	口縁部～頸部1/3、脚部 以下欠損。	明褐色。微細粒を多量に含む。良。	口縁部は復合口縁で、頸部から強く、やや外反ぎみに立ち上る。脚部は不明だが、肩を張るものと思われる。	口縁部外面・頸部内面はナデ。口縁部内面はハケ目の後ヘラナデ。頸部外見はハケ目の後ヘラミガキ。	内面のハケ目は外見のそれに比べ單位が粗い。
3	壺	16.6 21.8 12	口縁部1/5、 脚部1/5欠損。	明褐色。白色・赤色粒子を含む。良。	口縁部は緩やかに外反して立ち上る。脚部はあまり張らないが、球形に近く、やや突出した底部へ続く。最大径は脚部のやや上位にある。	口縁部外見はナデ。口縁部内面～頸部内面はヘラミガキ。底部を除くそれ以外はヘラナデ。	最大径21.6cm。
4	壺	(10.4) 16.2 3.5	口縁部2/3、 脚部1/3欠損。	明褐色。小石を多く含む。良。	口縁部は「く」の字状の頸部からわずかに外反ぎみに立ち上り、口唇部はつまみ上る。脚部は球形でそのまま平底の底部へ続く。最大径は脚部中位にある。	ナデ。	最大径14.3cm。
5	壺	10.8 17 5	完形。	赤褐色。赤色の小石を含む。やや不良。	口唇部はやや太い頸部から外反ぎみに立ち上る。脚部はあまり張らず、やや突き出した底部へ続く。底部は中央部が窪む。最大径は脚部中位にある。	口唇部はナデ。外見・口縁部内面・脚部内面は粗いハケ目。頸部内面はヘラケズリ。脚部内面はナデ。	最大径12.5cm。
6	甕	13.5 16.2 5	口縁部一部 欠損。	赤褐色。石英細粒を含む。良。	口縁部は「く」の字状に外反する。脚部は球形に近く、突出した底部へ続く。最大径は脚部中位にある。	口唇部内外面はナデ。頸部外見・脚部内面はヘラナデ。口縁部内面・脚部外見はハケ目。	最大径16.7cm。 底部は焼成後の穿孔。脚部外見にスス状の付着物。

7	斐	17 20 6.3	脚部一部欠損。	暗褐色。部分的に赤褐色。砂粒を含む。良。	口縫部は「く」の字状にわずかに外反する。脚部はあまり張らず突出した底部へ続く。最大径は脚部中位のやや上にある。	口縫部内外面はナデ。それ以外はヘラナデ。	最大径は19cm。脚部中位・口縫部外面にスヌ状付着物。
8	斐	12.3 14.2 5.7	完形。	明褐色。赤色砂粒・石英颗粒を含む。やや不良。	口縫部は「く」の字状にやや内湾ぎみに立ち上る。脚部はあまり張らず突出した底部へ続く。最大径は脚部中位にある。	口縫部外面はナデ。脚部内面上位・中位はヘラナデ。底部を除くそれ以外はハケ目の後ヘラナデ。	最大径13.8cm。脚部中位外面にスヌ状付着物。内面は化粧土の剥落。
9	斐	16.4 24.5 6.2	口縫部1/4・脚部一部欠損。	外面一明褐色・内面一暗褐色。白色粒子を含む。良。	口縫部は外反し、押圧による波状口縫。脚部は張り、球形でそのままや上に底風の底部へ続く。最大径は脚部中位にある。	ハケ目の後ヘラミガキをほぼ全面に施す。	最大径25cm。脚部中位外面にスヌ状付着物。
10	斐	16.2 19.7 5.6	口縫部・脚部一部欠損。	外面一黄褐色・内面一赤褐色。赤色の小石を多く含む。良。	口縫部は緩やかに外反し、脚部はあまり張らず、やや突出ぎみの底部へ続く。底部中央部はわずかに腫む。最大径は脚部中位にある。	口縫部内外面はナデ。脚部内面・脚部外面は中位まではハケ目。それ以下・脚部内面はヘラナデ。	最大径20.1cm。脚部中位上半・口縫部外面の一節および底部内面にスヌ状付着物。
11	斐	15.7 20.2 6.2	脚部1/5欠損。	明褐色。赤色砂粒・白色粒子を含む。良。	口縫部は「く」の字状にわずかに外反する。脚部は球形で、突出した底部へ続く。底部はわずかに凸状で不安定である。最大径は脚部中位にある。	口縫部内外面はナデ。口縫部内面・脚部外面はハケ目の後ヘラナデ。脚部内面はヘラナデ。底部の突出部はヘラケズリによる面取り。	最大径21.3cm。脚部中位にスヌ状の付着物が隠す。
12	斐	14.2 (15) -	脚部下半欠損。	明褐色。赤色砂粒・小石を含む。良。	口縫部はやや外反ぎみに立ち上り口唇部端は面を作る。脚部は球形に近いものになると思われる。最大径は脚部中位にある。	口縫部外面は下へ上のヘラケズリ。脚部外面は右→左へのヘラケズリの後ヘラナデ。口縫部内面はヘラミガキ。脚部内面はヘラナデ。	最大径18.3cm。
13	斐	16.5 21.6 5.6	口縫部1/5・脚部・底部一部欠損。	明褐色・白色粒子・石英粒を含む。良。	口縫部は緩やかに外反する。脚部はイチヂク形で、中位よりや上から急につばまり底部へ続く。底部中央部はやや腫む。最大径は脚部中位よりや上にある。	口縫部内外面はナデ。脚部外面・脚部内面はハケ目。脚部内面はヘラナデ。	最大径19cm。口縫部・脚部中位にスヌ状付着物。
14	斐	15.3 20.8 5.2	口縫部・脚部一部欠損。	明褐色。赤色砂粒を含む。良。	口縫部は緩やかに外反する。脚部はイチヂク形で、中位から急につばまり底部へ続く。最大径は脚部中位にある。	口唇部内外面はナデ。口縫部内面・脚部外面はハケ目。脚部内面はナデ。	最大径18.3cm。脚部中位以上にスヌ状付着物。
15	斐	13.9 (14.6) -	口縫部1/5・脚部下半以下欠損。	暗褐色。白色・赤色砂粒を含む。良。	口縫部は「く」の字状に外反する。脚部は球形になるものと思われる。最大径は脚部中位にある。	口縫部内外面はナデ。その他のはヘラミガキ。	最大径17.4cm。口縫部・脚部中位にかけ一側面だけにスヌ状付着物。

16	甕	15.7 16.4 5.1	口縁部1/3欠損。	明褐色。砂粒を含む。良。	口縁部は「く」の字状に外傾し、口唇部付近でわずかに内湾する。肩部はあまり張らずやや突出した底部へ続く。底部はやや上げ底風である。最大径は肩部中位にある。	口縁部内外面はナデ。肩部外面は中位まではハケ目。下位・内面はヘラナデ。	最大径17.2cm。 肩部上半部にスヌ状付着物。
17	甕	15.6 21 5.6	肩部・底部一部欠損。	明褐色。赤色の小石・石英粒を含む。良。	口縁部は「く」の字状に強く外傾する。肩部は肩を張り球形に近く、出した底部へ続く。底部は上げ底風である。最大径は肩部中位にある。	口唇部内外面はナデ。口縁部内外面はハケ目。肩部外面はハケ目。底部はハケ目。肩部内面はヘラミガキ。	最大径20.2cm。 口縁部・肩部下半にスヌ状付着物。
18	高杯	15.9 < 5.6> —	脚部欠損。	赤褐色。白色・黑色・石英砂粒を多量に含む。やや不良。	杯部は内湾ぎみに大きく開く。平面形はややぬがみ。卵形である。脚部は接合部から欠損しており、ホゾ状に差し込むものと思われる。	ヘラナデあるいはヘラミガキ。	
19	器台	7.7 7.8 裾径 11.5	口唇部一部欠損。	赤褐色。赤色砂粒を含む。良。	器受部は接合部から急速に大きく開き、口縁部は外面に明瞭な棱を作り「く」の字状にくびれて、わずかに外反ぎみにつまみ上る。脚部は「へ」の字状に大きく開き、裾部端は丸く終る。3孔。	口縁部内外面・裾部内面はナデ。器受部内面はヘラミガキ。外面はヘラナデ。脚柱部内面はハケ目。接合部はしばり目が残る。	器受部内面の中央部は磨滅が著しい。
20	器台	7.1 7.9 裾径 10.3	裾部一部欠損。	赤褐色。赤色砂粒を含む。良。	器受部はやや内湾ぎみに開き、口縁部は外面に明瞭な棱を作り、つまみ上る。脚部はやや直線的に「へ」の字状に開く。無孔。	口縁部外面・裾部内外面はナデ。器受部内外面・脚部外面はヘラミガキ。脚部内面はハケ目。	器受部内面の中央部は磨滅が著しい。
21	器台	7.4 < 4.5> —	裾部欠損。	明褐色。赤色砂粒を含む。良。	器受部は直線的に開き、口縁部は外面に棱を作り、つまみ上る。脚部は「へ」の字状に開くものと思われる。3孔。	口縁部外面・脚部内外面はナデ。器受部内面はヘラミガキ。器受部外面は下→上へのヘラナデ。脚部は上→下へのヘラナデ。	
22	鉢	12.6 4.7 4.6	口縁部1/4欠損。	赤褐色。赤色の小石・石英粒を含む。やや不良。	やや突出した平底の底部から内湾ぎみに立ち上り、そのまま口縁部に続く。	口唇部端・底部突出部はナデ。口縁部・体部内外面はヘラミガキ。底部はヘラナデ。化粧土をぬる。	内外面とも亀甲状のひび割れが著しい。

Y-1号跡 壺棺（第13図）

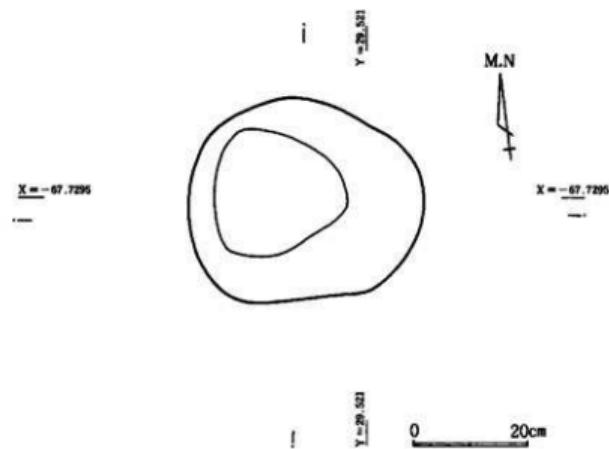
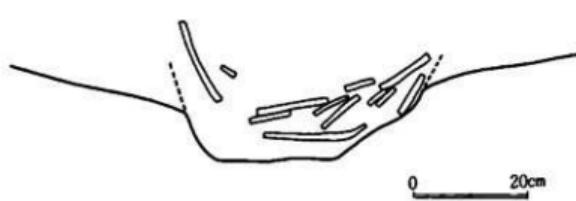
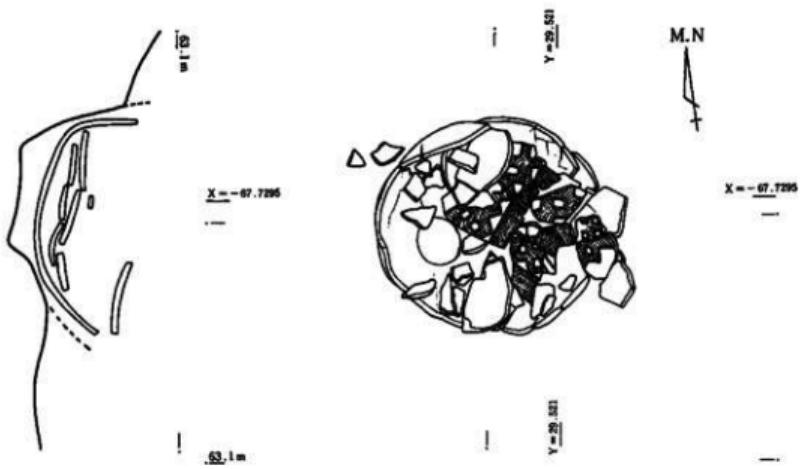
本跡は026-1号跡の調査中に検出したものである。026-1号跡の盛土を除去し終る時点でその存在を確認することができた。確認面は旧表土面であったが、その全体を認識するために周辺の旧表土層を掘り下げたため、図示した掘り込み面は本来の面より下ってしまった。

位置は026-1号跡の南側の墳丘部で、周溝から1.3m程内側に入った緩かな傾斜面中である。検出状況は、地表面側が土圧で内部に崩落していたが本来の姿をとどめていた。胴部下半を土塙底面に据えるように、全体を東に約35°程傾けた状態に置かれていたものと思われる。土器内部からは何も検出できなかった。

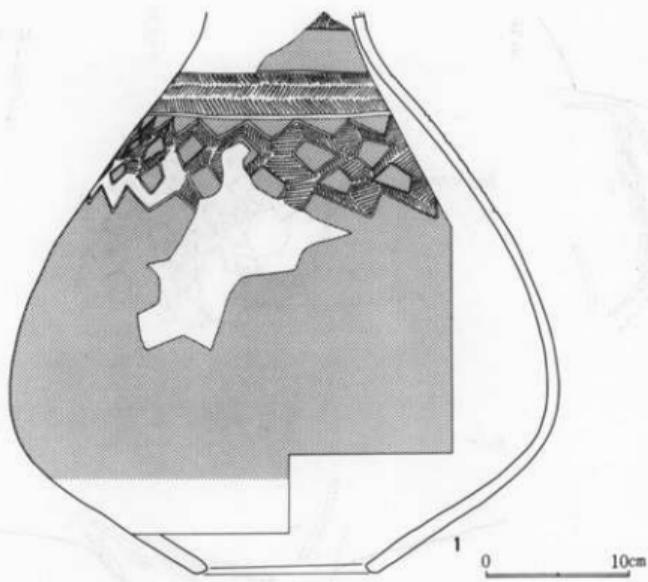
土塙は東西にやや長い楕円形で、短径約35cm・長径約40cmを計る。深さは、現状では10~20cmである。土器の大きさから復原すると、短径50cm前後・長径60cm前後・深さ40~50cm程度の土塙であったと推定することができる。掘り方は、土器の傾きに合せる様に東側が緩かな傾斜となっている。

土器（第14図）

壺棺の身に当るもので、壺形土器を転用したものである。壺棺の蓋に当るものは見出せなかつた。口縁部~頸部と底部を意識的に打ち欠いて使用したものである。胴部も胴部中位を中心として1/4程度欠損しているが、これが意識的なものかどうかは不明である。色調は明褐色で、胎土は白色などの小石を多く含み、焼成はやや不良である。現存高は38.7cm、底径は13cm、最大径は胴部下位にあり38.5cmを計る。器形の特徴は、肩を張らず下ぶくれの胴部から広い底部へ統くイチヂク形である。頸部から胴部上位にかけて3段の文様帶が見られる。上から順に第1段目は、全体は不明であるが、LRの斜行繩文を施し下端を沈線によって区画する。第2段目は、沈線によって区画された中にLRの斜行繩文を3段の羽状に施す。第3段目は、沈線によって格子状の区画を作り出し、中を方向によって向きを変えたLRの斜行繩文を施している。文様帶以外はヘラミガキを施し、胴部下半以上は赤彩されるが不明瞭な部分が多い。器形・文様の特徴から弥生時代後期前半の久ヶ原式土器と思われる。



第13図 Y-1号跡（整柵）平面図（ $\frac{1}{2}$ ）



第14図 Y-1号跡（壺棺）実測図（ $\frac{1}{4}$ ）

第3節 まとめ

今回の確認・発掘調査の結果、弥生時代後期中葉～古墳時代前期の住居跡の存在が明らかになった。また、県立市原園芸高等学校所蔵土器等によって古墳時代後期の住居跡の存在を想定することができた。具体的な内容を明らかにすることはできなかったが、本遺跡の北方に所在する南総中学遺跡とともに、養老川中流域における当該期の集落研究の一資料を提供することになると思う。土器については、県立市原園芸高等学校所蔵土器のうち第15図-1の土器は、器形の特徴とその文様の組み合せについて弥生時代後期を語るうえで1つの問題点を提供するものであろう。

集落跡の存在が明らかになったこととともに、7基の方形周溝墓と壺棺墓の検出と瓢箪塚古墳の全容を明らかにできたことは大きな成果と言える。関東地方における弥生時代～古墳時代にかけての主な埋葬形態の資料を得ることができ、今後の研究上重要な意味を持つてくる。

本調査の対象となった026-1号跡は、当初小円墳と考えられ、事実盛土が存在していたが、隣接するS-001号跡の周溝を利用して構築され、規模においても他の方形周溝墓と大きな隔りは認められなかった。台地上における遺構の占地などもおおむね一致しており、むしろそれらの方形周溝墓と同一系譜上にあるかのような様相を示している。時期的にも、026-1号跡・S-001号跡ともその出土遺物から考えて一若干の新旧関係はあるものの、五領期内の同一時期と考えられる。また、同様な遺構としての木更津市田川遺跡(註1)の例などから、026-1号跡は方形周溝墓の概念の中でとらえた方が良いと思われる。

瓢箪塚古墳は、昭和38年の発掘調査後、翌39年にその一部が公表されて以来、江子田古墳群内における盟主的な存在として論じられてきた(註2)。しかし、古墳自体の年代を決定づける遺物に乏しく、墳形・占地状況あるいは主体部の形態・主体部内出土遺物等の比較検討により、6世紀前半あるいは6世紀中葉の年代観が与えられてきた。今回の調査によって得られた遺物も少なく、より具体的な年代観を示すことはできなかった。しかし、その規模・形態についてより具体的な資料を得ることができ、しかも新たに盾形の二重周堀を廻らした前方後円墳であることが判明した。これらの結果から、瓢箪塚古墳の養老川中流域における優位性がより明らかになったものと思う。

註1 千田利明他 「田川遺跡群一千葉県木更津市田川遺跡群発掘調査報告書一」

田川遺跡群発掘調査会 1980年12月

註2 中村恵次「千葉県養老川流域の古墳群についての一考察」 古代第四十二・三号

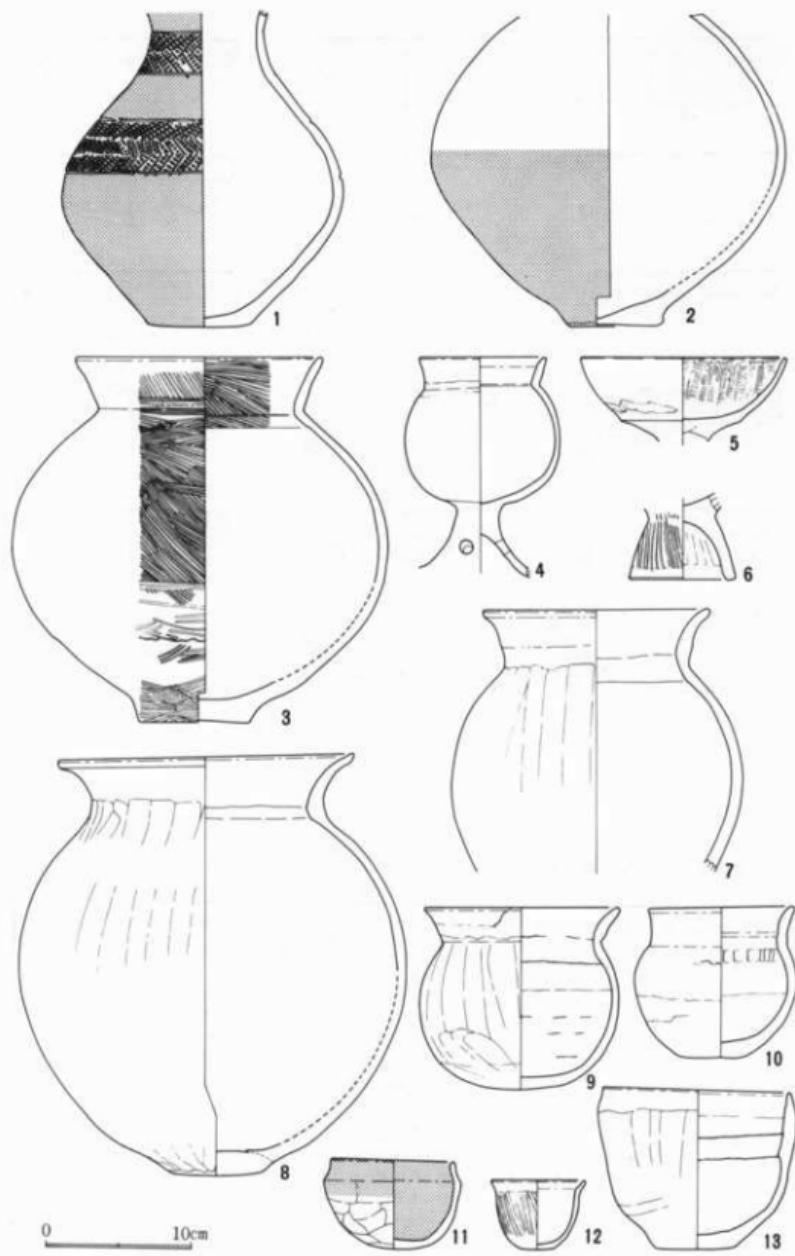
1964年3月

田中新史「持塚四号墳の調査」『南向原一上総国分寺台遺跡調査報告II-1』 1976年
甘粕健「IV. 麟老川水系の古墳分布と山王山古墳の歴史的性格」小出義治他『上総 山
王山古墳発掘調査報告書』市原市教育委員会 1980年3月

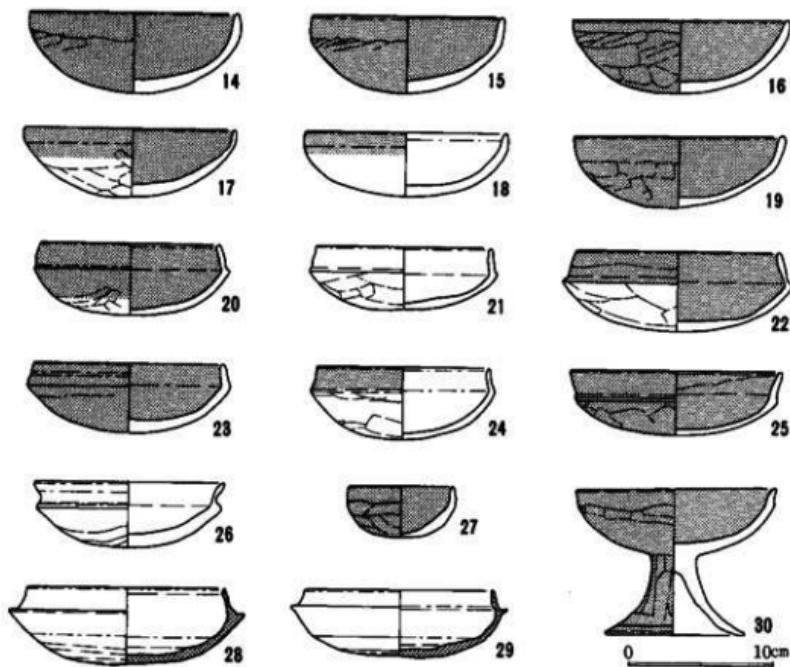
付編 千葉県立市原園芸高等学校所蔵土器

ここに挙げた土器は、雪解沢遺跡において1969年1月の水道管敷設作業およびその後行われたトレンチ調査によって得られた遺物の一部である(註)。出土地点については詳細を欠くため断定を下し得ないが、第2図中の今回調査対象となった地域に隣接する建物の間と考えられる。土器一覧の備考欄に記載した註番号のA・B・Cが、各トレンチ内の一括遺物と思われる。遺構等の検出状況を略述すると、Aトレンチでは、住居跡の一部と炉跡が検出されたとある。出土土器の様相や記述から判断して、弥生時代の住居跡と古墳時代後期の住居跡が重複している可能性が考えられる。Bトレンチでは、大・小の壺が出土し、住居跡と思われる周溝を検出したとあるが、方形周溝墓の可能性が考えられる。Cトレンチでは、遺構の検出はなかつたが、須恵器杯2個体分と石製紡錘車1個が出土したとある。

註 「雪解沢土器群発掘概報」鶴舞高校雪解沢 1970年11月 「市原市久保台・雪解沢遺跡発
掘概報」 鶴舞高校郷土史クラブ 1971年1月



第15図 千葉県立市原園芸高等学校所蔵土器 1 (1/4)



第16図 千葉県立市原園芸高等学校所蔵土器 2 (1/4)

県立市原園芸高等学校所蔵土器一覧

法量：口径×器高×底径、単位cm、() 推定、< > 現存

件目 番号	器種	法量	遺存度	色調・胎土・焼成	器形の特徴	成形・調整	備考
1	壺	— (21.5) 7	口縁部～頸部欠損。	黄褐色。小石を含む。良。	最大径は胴部中位にあり、ややソロバン玉に近い胴部から、平底の底部へ続く。頸部はヘラ引き沈線による区画の中にR-r-L-lの付加範文。胴部上位には、へら引き沈線による区画の中にR-r-L-l-R-rの付加範文。	ヘラミガキ。	雪解沢 No.13。 赤彩。最大径 14.2cm。
2	壺	— (21.3) 6.7	口縁部～頸部・胴部一部欠損。	明褐色。ち密、砂粒を含む。良。	胴部は球形で突出した底部へ続く。最大径は胴部中位にある。	胴部外面はヘラミガキ。 胴部内面はナデ。底部はヘラナデ。	雪解沢 A No.11。 赤彩。最大径 24.3cm。 胴部中位上半に 黒斑。

3	斐	16.8 24.7 7.5	口縁部一部欠損。	明褐色。砂粒・小石を含む。良。	口縁部は「く」の字形状にやや外反ぎみに立ち上る。胴部は唇を張り、突出した底面へ続く。最大径は胴部中位にある。	口唇部内外面・胴部内面はナデ。口縁部内外面・胴部外面中位まではハケ目。胴部外面中位以下はハケ目の後へラナデ。	雪解沢B No.3。 最大径2.7cm。
4	台付埋	8.7 <14.5> —	脚部欠損。	赤褐色。石英砂粒を含む。良。	口縁部は頭部内面に明瞭な後を作り外傾する。胴部はあまり張らずに後脚部へ続く。脚部部は「ハ」の字形状に開き、裾部で更に大きく開くものと思われる。3孔。	口縁部内外面・胴部内面はナデ。頭部・脚部の外面はヘラミガキ。	雪解沢B-4。 胴部外面にスヌ状の付着物。 脚部最大径10.7cm。
5	高杯	14.1 <6> —	脚部欠損。	明褐色。ち密。良。	口縁部は外面に明瞭な後を作り、内湾ぎみに立ち上る。	杯部外面はハケ目の後ヘラミガキ。杯部内面はハケ目の後暗文状のヘラミガキ。	雪解沢B-1 No.13。 杯部外面全体にスヌ状の付着物。
6	台付斐	— <5.8> 6.0±0.3	台部のみ残存。	褐色。小石を含む。良。	やや内湾ぎみに「ハ」の字形状に開く。	ハケ目。端部はナデ。	雪解沢No.6。
7	斐	15.5 <17.6> —	口縁部1/5、 胴部上位 ～中位2/1、 胴部下半 欠損。	明褐色。石英砂粒を含む。良。	口縁部は外反ぎみに立ち上り、口唇部で更に外反する。胴部はあまり張らない。最大径は胴部中位附近にある。	口縁部内外面～胴部内面はナデ。胴部外面は上→下へのヘラケズリ。	雪解沢A-11 No.7の2。 最大径20cm。胴部外面上半部にスヌ状付着物。
8	斐	20.2 28.3 6.6	胴部一部欠損。	明褐色。石英粒・白色砂粒を含む。良。	口縁部は頭部内面に後を作り外反し、口唇部はやや内湾ぎみにつまみ上る。胴部はやや張り、球形に近く、突出した底面へ続く。最大径は胴部中位にある。	口縁部内外面～胴部内面はナデ。頭部・胴部の外面は上→下へのヘラケズリ。	雪解沢A-20 No.2。 最大径26.5cm。
9	斐	13.4 12.2 6.2	口縁部一部欠損。	赤褐色。石英・赤色鐵鉱粒子を含む。良。	口縁部は外反ぎみに立ち上り、胴部はあまり張らずそのまま丸底の底面へ続く。最大径は胴部中位にある。	口縁部内外面～胴部内面はナデ。胴部外面の中位までは下→上へのヘラケズリ。下位は上→下へのヘラケズリ。	雪解沢A-20 No.8。 最大径13.6cm。
10	斐	10 10.1 5	口縁部一部欠損。	赤褐色。赤色粒子を含む。良。	口縁部は緩やかに外反して立ち上り、胴部はあまり張らずそのまま平底の底面へ続く。最大径は胴部上位にある。	口縁部内外面・胴部内面はナデ。肩部内面はヘラケズリ。胴部外面はヘラナデ。	雪解沢A-8 No.11。 最大径11.15cm。
11	碗	8.6 6 —	完形。	明褐色。赤色砂粒を含む。良。	口縁部は外面に後を作り、外反ぎみに内傾する。体部は被の部分からすばまり丸底の底面へ続く。最大径は被の部分にある。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面は右→左へのヘラケズリ。	雪解沢No.3。 最大径9.5cm。赤彩。
12	ミニチュア (斐)	6.5 4.7 2.4	口縁部～胴部1/3欠損。	赤褐色。白色粒子を含む。良。	口縁部は外面に弱い後を作り外反する。胴部はそのまま様を減じて平底の底面へ続く。最大径は口縁部にある。	口縁部内外面・胴部下位・底面はナデ。胴部内面・外面中位以上はヘラミガキ。	雪解沢No.4。

13	体	12.9 10.7 5.9	口縁部1/3欠損。	明褐色。赤色粒子を含む。良。	口縁部は外面に弱い模を作り、外側だけ器壁を減じて立ち上る。体部はほぼ直線的に模を減じ下位から急にすぼまり、平底の底部へ続く。最大径は腰の部分にある。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面はヘラケズリ。	雪解沢A No.9。 体部中位以上に部分的にスヌ状の付着物。最大径13.7cm。体部内面に輪積模を明瞭に残す。
14	杯	14.3 5.6 -	完形。	明褐色。ち密。小石を含む。良。	比較的深い碗形で口縁部はやや直立ぎみに立ち上る。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面～底部は右→左へのヘラケズリ。	雪解沢A-17 No.24。 赤彩されているが剥落が著しい。
15	杯	13.4 5.3 -	口縁部～体部一部欠損。	明褐色。ち密。赤色砂粒を含む。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に弱い模を作り、やや直立ぎみに立ち上る。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面～底部は右→左へのヘラケズリ。	雪解沢A-1 No.23。 赤彩。
16	杯	15 5.1 -	口縁部～体部1/3欠損。	明褐色。微細粒。赤色粒子を含む。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は短く、わずかに内湾ぎみに立ち上る。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面～底部は右→左へのヘラケズリ。	雪解沢A-13 No.22。 赤彩。内面の赤彩は剥落が著しい。
17	杯	14.4 4.8 -	ほぼ完形。	明褐色。ち密。赤色粒子を含む。良。	体部は浅い碗形で口縁部はわずかに内湾ぎみに立ち上る。	体部外面上位～体部内面はナデ。体部外面上位～底部は左→右へのヘラケズリ。	雪解沢A-5 No.27。 赤彩。内面の赤彩は剥落が著しい。
18	杯	14.1 4.4 -	口縁部～体部1/3欠損。	黄褐色。ち密。良。	体部は浅い碗形で、口縁部はわずかに内湾ぎみに立ち上る。	ナデ。	雪解沢A-1 No.26。 赤彩。
19	杯	14.6 5 -	口縁部一部欠損。	明褐色。小石を少量含む。良。	体部は浅い碗形で、ほぼそのまま口縁部に延く。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面～底部は右→左へのヘラケズリ。	雪解沢A-15, 16 No.25。 赤彩。
20	杯	12.2 4.8 -	口縁部一部欠損。	明褐色。ち密。赤色粒子を含む。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に明瞭な模を作り、内湾ぎみに内傾する。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面～底部は右→左へのヘラケズリ。	雪解沢C-10 No.21。 赤彩。内面の赤彩は剥落が著しい。
21	杯	12.3 4.2 -	口縁部～体部1/3欠損。	外一明褐色・内一灰褐色。ち密。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に明瞭な模を作り、わずかに外反ぎみに内傾する。	口縁部内外面～体部内面はヘラミガキ。体部外面は右→左へのヘラケズリ。	雪解沢A-10 No.16。
22	杯	(14.1) 5.3 -	口縁部～体部1/3欠損。	黄褐色。赤色粒子をやや多く含む。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に明瞭な模を作り、わずかに内湾ぎみに内傾する。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面は左→右へのヘラケズリ。	雪解沢A No.20 の2。 赤彩。内面の赤彩は剥落がみられる。
23	杯	13 4.8 -	ほぼ完形。	明褐色。ち密。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に模を作り内傾する。口縁部外面の中程に弱い沈線がある。	口縁部内外面～体部内面はヘラミガキ。体部外面～底部はヘラケズリの後ヘナデ。	雪解沢A-9 No.17。 赤彩。

24	杯	12 4.9 —	口縁部1/1. 底部一部欠損。	明褐色。大部分は黒斑により黒づむ。ち密。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に梗を作り、外反ぎみに内傾する。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面は左→右へのヘラケズリの後→右へのヘラナデ。底部は左→右へのヘラケズリ。	雪解沢 A-1 No.8。 赤彩。
25	杯	14.6 4.4 —	口縁部一部欠損。	明褐色。微細粒・赤色粒子を含む。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に梗を作り、外反する。	口縁部外面～体部内面はナデ。口縁部内面は左→右へのヘラケズリ。体部外面～底部は右→左へのヘラケズリ。	雪解沢 A-12 No.15。 赤彩。
26	杯	(13.1) 4.4 —	口縁部2/2欠損。	明褐色。ち密。赤色粒子を含む。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に明瞭な梗を作り、一旦くびれて外反する。	体部外面中位～内面はヘラミガキ。それ以外は左→右へのヘラケズリ。	雪解沢 A-1 No.19。
27	杯	(7.3) 3.4 —	口縁部～体部3/5欠損。	明褐色。ち密。良。	全体としてやや深い碗形であり口縁部は内湾する。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面はヘラケズリ。	雪解沢 A-29。 赤彩。内面の赤彩は剥落が著しい。
28	杯	13.6 5.2 —	口縁部～底部2/2欠損。	灰色。ち密。わずかに小石を含む。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に明瞭な段を作り内傾し、口唇部はつまみ上がる。	左回転ロクロ整形形。体部外面上半～内部はナデ。体部外面下半～底部は回転ヘラケズリ。	雪解沢 C-8。 須恵器。
29	杯	13 4.5 —	ほぼ完形。	灰色。ち密。わずかに小石を含む。良。	体部は浅い碗形で、口縁部は外面に明瞭な段を作り、外反ぎみに内傾する。	左回転ロクロ整形形。体部外面上半～内部はナデ。体部外面下半～底部は回転ヘラケズリ。	雪解沢。 須恵器。底部に自然釉。
30	高杯	13.8 9.9 横径 9.6	口縁部一部欠損。	明褐色。砂粒を含む。良。	杯部は浅い碗形の体部から、口縁部はわずかに外反する。脚柱部は柱状に近く、脚柱部で大きく「へ」の字状に開く。	口縁部内外面～体部内面はナデ。体部外面は左→右へのヘラケズリの後→右へのヘラナデ。脚柱部外面は上→下へのヘラケズリの後→右へのヘラナデ。脚部内面はナデ。	雪解沢 A-2 No.12。 赤彩。



道路周辺地形 航空写真（千葉県立市原園芸高等学校提供）

図版 2



1. 第2トレンチ



2. 同セクション

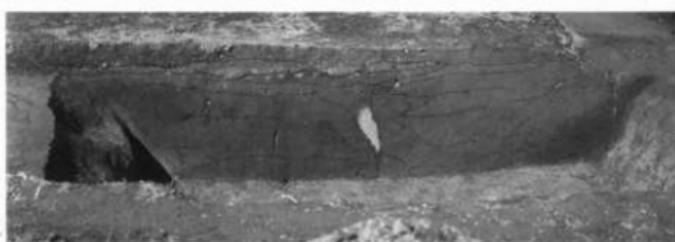


3. 第4トレンチ

瓢箪塚古墳



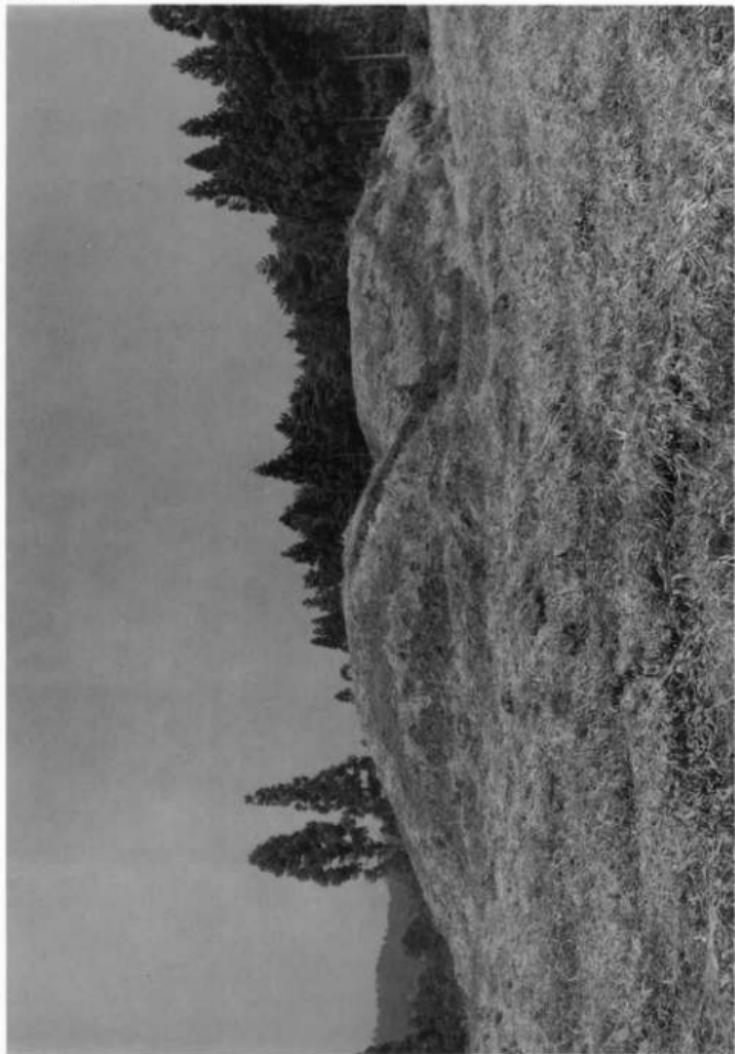
1.
第1トレンチ



2.同上
セクション



瓢箪塚古墳 3.第1グリッド



瓢箪塚古墳旧状全景 南西より（南總郷土文化研究会提供）



1. 発掘前全景



2



3

026-1号跡 2.3.セクション

図版 6



1. 026—1号跡発掘後全景



2. S-001号跡発掘後全景



1



2



3

S-001号跡 1.セクション 2.遺物出土状況 3.周溝掘り込み



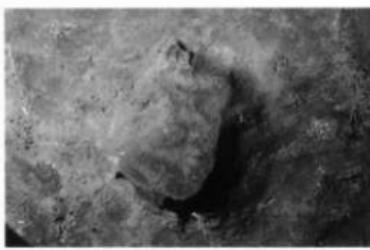
1



2



3



4

Y-1号跡 1~4. 検出状況

图版 8



1



2



3



4



5



6



7



8

出土土器 026-1号跡-1~6 S-001号跡-7·8



1



2



3



4



5

出土土器 S-001号跡 1~5.

図版 10



1



2



3



4



5



6



7



8

出土土器 S-001号跡-1~8.



Y-1号跡（壺棺）

図版 12



1



2



3



4



5



6



7



8

千葉県立市原園芸高等学校所蔵土器 1 ~ 8 .

市原市雪解沢遺跡

—千葉県立市原園芸高等学校グランド造成に伴う埋蔵文化財調査報告書—

印 刷 昭和59年3月20日
発 行 昭和59年3月31日

発 行 千葉県立市原園芸高等学校

市原市鶴舞1159-1 (0436)92-0009

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

千葉市亥鼻1-3-13 (0472)25-6478

印 刷 有限会社 正 文 社

千葉市都町2-5-5 (0472)33-2235
